

2023年4月3日

みずほディーラーズアイ (2023年4月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 125.00 ~ 135.00

市場営業部 為替営業第一チーム 多川 昇吾

■ 先月の為替相場

3月のドル/円相場は、136円台前半でオープン。月初は米金利低下を背景にドル売りが強まり135円台前半まで下落するも、米2月ISM製造業景気指数の上昇と、米10～12月期単位人件費(確報)が速報値から上方修正されたことを受け、米金利が上昇に転じる中ドル/円は137円台を示現。ドル買い一服後は値を戻すも、7日のパウエルFRB議長の上院議会証言で、「必要であれば利上げペース加速の用意」、「金利の最終到達点は予想を上回る可能性が高い」といったタカ派な姿勢が示されると全面ドル買い。8日には年初来高値となる137.90円まで上値を更新した。9日、米銀の経営難に端を発したリスク回避の動きが強まり、ドル/円は136円を割れるなど売り優勢となるも、10日に日銀の金融政策で、現行政策の維持が発表されると、発表直後は円売りで反応し137円手前まで上昇した。その後の米2月雇用統計では賃金伸び率が鈍化したことを受けドル売りで反応。加えて米地銀の破綻に端を発する信用不安が渦巻く中、リスクオフの円買いも相まって13日にかけてドル/円は132円台前半へ続落。しかし14日には、悲観ムードが若干後退してか、米金利上昇を受けて133円台半ばに上昇するとともに、米2月消費物価指数(CPI)のコア指数が前月比+0.5%と市場予想を上回り、米金利上昇とともに135円を目指す展開となった。15日、欧州大手銀行に関する信用不安が取り沙汰されると、リスクオフから米金利が急低下する中ドル売りが優勢となり、16日には米地銀が身売りを検討との報道に円買いも加速し、ドル/円は131円後半まで下落。その後に複数の米大手銀行が支援に乗り出す旨が公表されると、多少ドルが買い戻される展開となった。市場のリスクオフムードが続く中、20日にドル/円は130円台後半まで下落したが売り一巡後は値を戻し、132円台を回復。しかしその後22日のFOMCで市場予想通りの+25bp利上げが、ハト派利上げと解釈されるとドル売りが強まる展開となった。イエレン米財務長官から「預金保険の適用範囲、大幅な拡大は検討せず」との発言が出ると、銀行株主導で米株が大きく下落。その流れを受け23日にドル/円は130円台前半まで下落すると、24日には欧州銀行株の大幅安を受けて更にドル売りが加速。ドル/円は一時129円台後半まで下落した。27日には、米地銀関連のポジティブなヘッドラインを受けリスクオフが後退し、月末にかけてドル買い優勢のまま、ドル/円は133円台後半まで上昇する局面もあった。

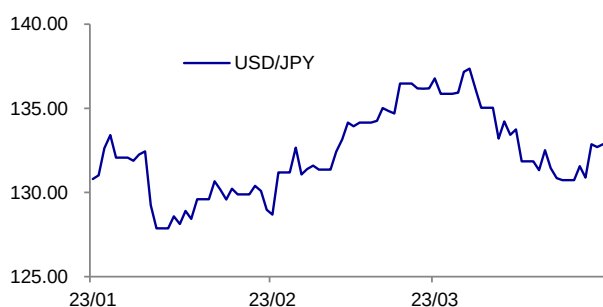
■ 今月の見通し

4月のドル/円相場は、ドル安・円高トレンドを予想する。3月のドル/円相場は、月中旬に米地銀及び欧州大手銀行への信用不安に関するヘッドラインが続くと、リスクオフムードが市場を支配する中、ドル/円は130円を割り込むなど上値の重い展開が続いた。その後は米地銀の買収報道をはじめとし、金融システムへの過度な不安が払拭されつつあるとして、再びドル買いが再開。しかし米2月消費者物価指数(CPI)発表後の135円を目指す動きと比較してもドル/円の戻りは鈍く、バイデン米大統領も「銀行危機はまだ収束していない」と発言するようにあくまで「過度な不安」が若干後退したのみに過ぎず、銀行規制強化により新たなリスクオフ要因が出てくる可能性も考慮すべき展開であろう。また、パウエルFRB議長から「年内あと1回の追加利上げを想定している」との発言があったが、現時点での市場の利上げ織込みは五分五分となっており、これは引締めによる金融環境への負の影響を不安視する動きと考える。加えて4月末には新体制初の日銀政策決定会合を控える。こちらは今のところ政策の現状維持が基本線との見方が強いものの、このタイミングでの政策路線変更の可能性も否めない。また、21日発表予定の日3月CPI結果にて予想以上のインフレ圧力の高まりが確認されれば尚のこと政策修正・変更が現実味を帯びてくるだろう。そうなれば、FRBによる利下げが焦点となり始めたマーケット環境においては将来的な日米金利差の縮小が意識される展開も想定される。以上を踏まえ、4月のドル/円には下押し圧力が強まりやすいものと予想する。

一方で3月は米経済指標も堅調さが目立ち、一部Fed高官からも「インフレは依然として高すぎる」などの発言があるように、米国のインフレ圧力は高い水準にある。3月初にはパウエルFRB議長のタカ派的な発言を受け、米金利上昇からドル買いが優勢となる局面もあった。従前と変わらず、FRBの至上命題はあくまでインフレの抑制であるため、「金利の最終到達点は予想を上回る可能性が高い」と言ったパウエルFRB議長の発言も踏まえると、利下げの議論は若干時期尚早感が否めないとの見方もある中、足許の金融環境への不安が燦る状況における、Fed高官らによる5月FOMCを見据えた発言内容には、今後の米金融政策を見通すうえでも注視しておきたい。

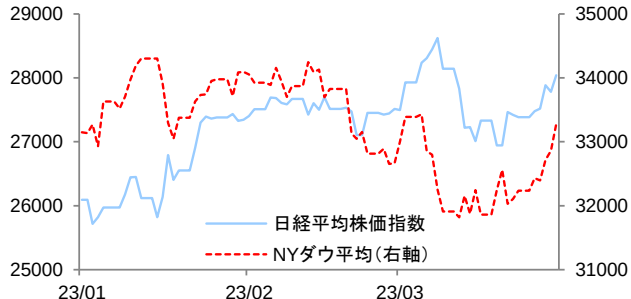
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	米ISM製造業景況指数	2月	48.0	47.7	47.4
3/3	米ISM非製造業景況指数	2月	54.5	55.1	55.2
3/8	米貿易収支	1月	-\$68.7b	-\$68.3b	-\$67.4b
3/10	米非農業部門雇用者数変化	2月	225k	311k	517k
3/10	米失業率	2月	3.4%	3.6%	3.4%
3/14	米消費者物価指数	2月	6.0%	6.0%	6.4%
3/15	米小売売上高	2月	-0.4%	-0.4%	3.0%
3/22	FOMC政策金利(上限)	-	5.00%	5.00%	4.75%
3/24	製造業PMI(速)	3月	47.0	49.3	47.3
3/28	コンファレンスボード消費者信頼感	3月	101.0	104.2	102.9

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	5名	135.50 ～ 130.00	ベア	13名	135.00 ～ 128.00	※ レンジは中心値
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------	-----------

河合	ベア	135.00 ～ 126.00	米地銀破綻・国際金融不安に端を発したFRBのハト派スタンスへの転換を受け、ドル/円は下値を探る展開を予想。4月植田新体制下初の日銀金融政策決定会合も円買い要因となるか。
宮地	ベア	135.00 ～ 128.00	4月の植田新日銀総裁体制発足後初の政策決定会合に注目が集まることに加え、米国の利上げ局面の終焉が意識される状況下、ドル/円の上値は重くなることを予想。
筒井	ベア	134.00 ～ 125.00	米国では金融機関規制厳格化に伴う商業用不動産等のアセット価格影響とインフレ、日本では新総裁の下での金融政策、特にYCC対応が焦点。4月は米のアセット動向懸念により着目され金利低下・ドル安がメインシナリオ。
加藤	ベア	133.50 ～ 128.00	ヘッジコストとソルベンシー問題で投資家はヘッジ付きオープンとともに外債投資に及び腰。欧米金融不安、主要国利上げ局面終了時期をめぐる思惑、植田新日銀総裁に対する期待により円売りは望めない。130円以下を再度試しに行きそう。
山崎	ブル	135.50 ～ 129.50	金融機関の信用不安は一旦は落ち着きを見せており、この問題が落ち着けば、残るはやはりインフレファイターの中銀の動向にふたたび耳目が集まるものと想定。その際は、上昇に転じると想定しており、ドル/円は堅調な推移を予想。
伊藤	ベア	135.00 ～ 127.00	ドル/円はFRBと市場織り込みに大きな乖離がある。直近の金融不安を払拭できるかが鍵。米金利上昇が限定的となる中ではドル円の上値は重いだろう。また、本邦CPI、ベア回答を受けて日銀の政策修正への警戒感も高まってくるか。
山岸	ブル	137.00 ～ 130.00	米銀破綻に起因する市場不安の動向次第だが、沈静化すれば米高インフレから利下げ期待は時期尚早で、ドル円は底堅い展開か。直近下落局面での130円割れ滞空時間短く、年間20兆円規模の本邦貿易赤字で需給面からの円売りニーズ強い。
尾身	ブル	135.00 ～ 130.00	今後は米インフレの長期化を背景とした高い政策金利の維持と、金融システムの不安を誘発しかねない政策金利の引き上げの難しさの間に挟まれてレンジ取引となりそう。
上野	ベア	137.00 ～ 126.00	円買い要因となった欧米金融機関の混乱は小康状態となり、足元は巻き戻しが起こっている認識。新体制となる日銀に対する政策変更の期待が高まっている状況下、下値を模索する展開がメインシナリオか。

甲斐	ベア	135.00 ～ 130.00	リスクオフ後退から前半は円安進行を予想する。一方、好調な米指標やFRB高官からのタカ派発言が続いても、更なるサプライズとならず、伸び悩むと予想。一方で、月末のBOJでの政策変換懸念もあり、徐々に水準を切り下げると予想。
松永	ブル	135.50 ～ 129.50	FRBのインフレ抑制姿勢という大きな方向性が変わらない中、金融機関の流動性不安に対する当局の早い動きもあり、金融不安の鎮静化とともに、再びドルは強さを取り戻そう。
小野崎	ブル	137.50 ～ 130.00	円買い材料にも乏しくドル買い優勢を見込むもFRBの利上げも終焉に向かおうという中で上値も限られるか。130円を下値に直近高値である138円手前を目線にしたい。
原田	ベア	137.00 ～ 125.00	米地銀の連鎖破綻や欧州銀行の信用不安を発端にした合併など、先月末にかけてリーマン以来の金融危機を彷彿とさせる事態に、米利上げ折込は大幅に低下。今年半ばには利下げを織り込み始めたことから、ドル/円は下落方向を見込む。
上遠野	ベア	135.00 ～ 127.50	金融不安の連鎖によるリスクオフは後退すれども払拭せず。FRBの利上げ見通しも急速に萎む中、米金利の戻りは限定的。4月末には植田日銀新総裁のもと初回の金融政策決定会合を予定し、政策方向修正への期待感から円買いも進み易いか。
小林	ベア	137.00 ～ 128.00	米地銀の破綻を発端に、欧米における金融不安が完全には払しょくされていない状況が継続。パウエルFRB議長は年内の利下げはないと明言しているものの、市場は年内利下げを織り込んでおり、ドル円は上値重い展開が継続と予想。
鈴木	ベア	135.50 ～ 128.00	米地銀の破綻に端を発した景気減速懸念やFRBの年内利下げの思惑はも存在しており、ドル安地合いは継続か。植田新体制がスタートする日銀に対する政策修正の期待感も上値を押さえる要因となりそう。
木村	ベア	134.00 ～ 128.00	銀行の信用不安問題が落ち着きつつあるものの完全な懸念払しょくには程遠く、疑心暗鬼の中で円高リスクは残存。月後半には植田新議長を迎えて初のBOJもあり、政策変更を警戒して上値の重い推移を予想。
大熊	ベア	135.00 ～ 128.00	欧米の金融システム不安が燦る状況下、米景気の先行き不透明感により年内利下げ観測が高まっている。一方で、日銀は植田新総裁が就任し、政策修正への期待から円買いが強まりやすく、ドル/円は下値を模索する展開を予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0600 ~ 1.1100
EUR/JPY 138.00 ~ 147.00

市場営業部 為替営業第一チーム 河合 良介

■ 先月の為替相場

先月のユーロ相場は、月半ば、欧州大手銀行に対する信用不安から下落する場面も見られたが、総じてハト派な内容となった米3月FOMCの結果やECB高官のタカ派な発言を受け、上昇する展開となった。

月初、1.0573近辺でスタートしたユーロドルは、1日独1月CPI(速報)の良好な結果を受け一時1.0691まで上昇も、翌2日発表されたユーロ圏2月HICP消費者物価指(速報)はコア指数が過去最高の伸びとなるも反応薄、米金利上昇による欧米金利差拡大を受けて1.05台後半まで下落した。

第2週に入り、週前半、堅調な株式市場を睨みながら、円買い・ドル売りの影響で1.07近辺まで上昇していたが、7日NY時間、パウエルFRB議長のタカ派な議会証言を受けた米金利上昇から、1.055近辺まで下落した。10日の米2月雇用統計では、非農業部門雇用者数は市場予想を上回ったものの、失業率は予想以上に悪化、平均時給も予想を下回ったことで、賃金インフレ鎮静化の思惑からドル売りで反応。米地銀の経営破綻の影響を受けた米長期金利低下に伴うドル売りが加速し一時1.07台まで反転上昇し、1.06台半ばで越過となった。

第3週目、米地銀破綻の余波が残る中、15日、独金利上昇を受け一時1.07台半ばまで再度上昇したが、欧州大手銀行に対する信用不安まで波及、独金利急低下を背景に一時2か月半ぶりの安値となる1.0517まで急落。翌16日のECB政策理事会では、欧州大手銀行の信用不安を受け、利上げ幅縮小・利上げ見送り予想も浮上したが、当初予告通り+50bpの利上げを決定。しかし今後の利上げ見通しが示されなかったことで独金利が低下し1.05台半ばまで急落した。

第4週目、1.0681でオープンしたユーロドルは、スイス銀行大手の買収報道による不安後退や22日に開催されたFOMC後のパウエル議長の会見がハト派と解釈されたことから上昇、一時2月初旬以来となる1.09台に急伸し、23日には月高値となる1.0930をつけたが、24日、再度欧州銀行の経営不安を背景とした欧州銀行株の下落を受け、ユーロは1.07台前半まで急落した。

第5週目、ECB高官によるタカ派発言やドイツの強いインフレ指標を受け、ユーロは再度上昇し、31日東京11:00時点でユーロは1.09付近で推移している。

■ 今月の見通し

今月のユーロドルは国際金融不安関連のヘッドラインで上下する可能性を含みつつも、欧米の金融政策スタンスの違いを背景に引き続きユーロ堅調な推移を予想。

1月、欧米の金融政策スタンスの違いから堅調な推移を見せていたユーロドルだが、2月・3月はドルの強弱に依存した動きがメインに。先月2日(欧州大手銀行の信用不安発生前)、注目のユーロ圏2月HICPはコア指数が過去最高の伸びとなったが市場の反応は薄く、市場は早い段階でのターミナルレート到達を織り込んでいた恰好だった。

欧州大手銀行の信用不安発生直後16日に実施された3月ECB政策理事会では、利上げ幅縮小・利上げ見送り予想すら浮上する中、当初の予告通り3会合連続で+50bpの利上げを決定、預金ファシリティ金利を2.50%から3.00%に引き上げた。声明文では「インフレは長らく高すぎる状態が続くと予想される」とし、インフレ抑制を優先する姿勢を示す一方、次回会合以降の追加利上げには触れられなかった。

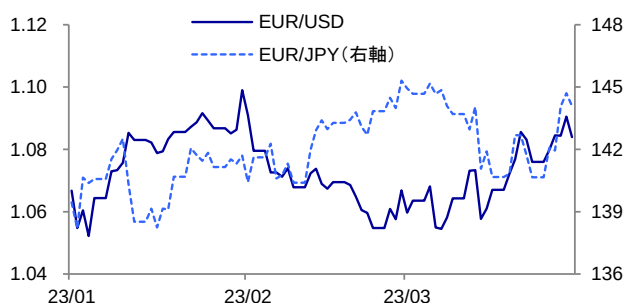
一方で、ECBスタッフ見通しでは、「金融市場の緊張持続や銀行融資の減速、金融引き締め効果の発言などがインフレ圧力を弱める可能性がある」とし、インフレ見通しは、12月比下方修正されたが、2023年: +5.3%、2024年: +2.9%と年内の利上げ継続は支持される内容となっている。

米国に目を向けると、22日に実施されたFOMCでは、ECB同様利上げ停止観測も浮上する中、+25bpの利上げが決定されたが、パウエルFRB議長は、金融不安が利上げと同程度の効果があることを認め、5月利上げ停止が濃厚な情勢となっており、FRBはハト寄りに。

欧州大手金融機関の信用不安問題は、同業者による買収合意に至るも、依然神経質な相場展開が継続しており余談を許さない状況である一方、ラガルドECB総裁は、不透明感が強いことを認めつつ、今後の利上げはデータ次第と強調しており、国際金融不安の動向を見極めながら、5月開催予定のECB政策理事会に向け、3月31日日本時間18:00発表予定のユーロ圏3月HICPに注目が集まる。(3月31日12:00現在)

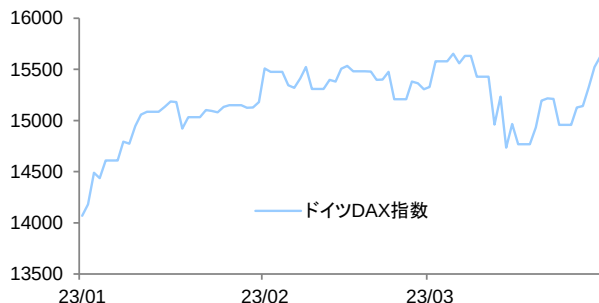
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/2	EU圏 CPI速報	2月	8.30%	8.50%	8.60%
3/2	EU圏 CPI(コア)速報	2月	5.20%	5.30%	5.30%
3/10	米非農業部門雇用者数	2月	225K	311K	517K
3/10	米平均時給(前年比)	2月	4.7%	4.6%	4.4%
3/14	米CPI(前年比)	2月	6.0%	6.0%	6.4%
3/14	米CPIコア(前年比)	2月	5.5%	5.5%	5.6%
3/16	ECB預金ファシリティ金利	3月	3.00%	3.00%	2.50%
3/17	EU圏 CPI確報	2月	8.50%	8.50%	8.60%
3/22	FOMC政策金利(上限)	3月	5.00%	5.00%	4.75%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	16名	1.1100 ～ 1.0675	ベア	2名	1.1100 ～ 1.0575
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

河合	ブル	1.1100 ～ 1.0600	国際金融不安関連のヘッドラインで上下する可能性を含みつつも、欧米の金融政策スタンスの違いを背景に総じてユーロが堅調な展開を予想。
宮地	ブル	1.1200 ～ 1.0700	ECBのタカ派スタンスに変化なし。FRBの利上げ局面の終焉が近づくなか、基本的にユーロが選考されやすい地合が続こう。また、欧州主要国の貿易収支にも改善傾向が見られることもユーロサポート材料か。
筒井	ベア	1.1000 ～ 1.0650	米国の銀行向け規制厳格化に伴う資産価格への悪影響と欧州のインフレへの断続的利上げの景気腰折れリスクに焦点が移る展開を想定。ECBの利上げは市場に織込済で、景気動向へ注目したい。
加藤	ブル	1.1200 ～ 1.0700	金融不安はシステミックリスクに発展させないことに強気のECBと、けいにも目が向き若干タカ派姿勢が穏やかになったFRBの姿勢の違いは依然大きい。天井感はあるが、相対的な金利動向の差を背景にもう少し上トライがありそうである。
山崎	ブル	1.1150 ～ 1.0700	堅調な推移を予想。金融機関をめぐる信用不安も落ち着きをみせて、再びインフレをめぐる中銀の動向が注目されるものと想定。一方でドルも買われることから、その上昇レベルは限定的か。
伊藤	ベア	1.1200 ～ 1.0500	欧州インフレ率の高止まりを受けて、ECBは更なる利上げが必要とのスタスに変更なし。金融懸念時でも下落幅は限定的で、利下げ見通しのドルに対し買われやすい。ただ、ドル売りも一巡、EURロングポジションを鑑みると上値は重い。
山岸	ブル	1.1100 ～ 1.0700	ユーロ圏コアインフレ率は過去最高を更新。賃金騰勢でサービス物価強く、インフレ警戒からECB利上げはあと2～3回あると見る。金融政策面でユーロ買われやすいも、節目の1.10が近づいて調整も入り、高値もみ合いの展開を予想。
尾身	ブル	1.1100 ～ 1.0500	ECBの利上げ継続により底堅い推移が継続すると考えている。但し、金融システム不安の話が出てくるとユーロの上値が重くなる。
上野	ブル	1.1200 ～ 1.0600	欧州インフレ指標は低下基調にあるも、ECB要人が金融機関の混乱収束後の追加利上げに言及、米国に比して利上げ余地は大きい印象。一方、金融機関混乱の震源地通貨であり積極的にポジションを持ちにくく急激な上昇は望みにくい。
甲斐	ブル	1.1100 ～ 1.0800	良好な米指標やFED高官からのタカ派発言は続くと思われるが、ECBの着実な利上げ進行による金利差縮小が意識される展開が続くと予想する。2月に抜けきれなかった1.10水準を超えて切り上がる予想。
松永	ブル	1.1100 ～ 1.0600	ECBの利上げ局面がFRBよりも長期化する可能性が出てきている中、利上げサイクルの終了が意識されるドルに対して引き続きユーロは底堅い動きが継続しそう。
小野崎	ブル	1.1200 ～ 1.0500	欧州圏のインフレ警戒感は引き続き強くECBの利上げ姿勢も継続されるだろう。FRBの利上げ姿勢と比べECBの利上げ姿勢の方が強くユーロ買い優勢の展開を予想。
原田	ブル	1.1100 ～ 1.0650	ユーロ圏のコアインフレ率は引き続き高止まりの状況となっている。かかる状況下、ECBのスタンスに変化はない。米政策金利の織り込み状況を考慮すると、ユーロは底堅い動きとなろう。
上遠野	ブル	1.1100 ～ 1.0700	高止まりするコアインフレ抑制を最優先とし、FRBに比べ大幅利上げへのスタンスが強固で対ドル強含みがメインシナリオ。金融不安拡大への懸念は燦るも、火付け役が米国であるだけにユーロ/ドルの一辺倒の下落は見込みにくい。
小林	ブル	1.1000 ～ 1.0750	米年内利下げが市場にて織り込まれている中、欧州はインフレが依然と高止まりしている状況のもと、金融引き締め長期化が見込まれている。対ドルでユーロ上昇トレンドが継続と想定。
鈴木	ブル	1.1100 ～ 1.0750	金融不安を欧州圏の高いインフレ率を背景にECBのタカ派姿勢は不変。今年中の金利引き下げ期待が一定数存在している米国との差は大きく、EURは底堅い推移になることを予想する。
木村	ブル	1.1300 ～ 1.0600	銀行信用不安の一段落により買い戻しが進み、改めて中銀スタンスがクローズアップされよう。3月半ばの高値水準が意識されつつも、景気回復期待が強まる中利上げ期待上昇により底堅い推移を予想。
大熊	ブル	1.1200 ～ 1.0600	早期の利上げ停止と年内の利下げ観測が強まるFRBに比べて、ECBの追加利上げの余地はまだ残存すると思われる。欧州の金利先高観がサポートとなって、ユーロは底堅い展開を予想。

英ポンド相場

予想レンジ:

GBP/USD 1.1900 ~ 1.2500
GBP/JPY 159.00 ~ 166.00

欧州資金部 天沼 幹

■ 先月の為替相場

月初1日は対ドルで1.20レベルで始まり、ペイリー英中銀総裁の利上げに関する発言がハト派に解釈されたことから、一時1.19台半ばまで下落。3日は、米2月ISM非製造業景気指数が市場予想を上回る結果となったが、米10年債利回りが4%を再度下回り、1.20台半ばまで回復した。翌週7日、パウエルFRB議長によるタカ派発言から市場が次回会合における+50bpの利上げを織り込みポンドは1.18台前半まで急落し、サポートとなっていた200日移動平均線を割り込む。10日は米2月雇用統計が発表され、失業率と平均時給がハト派に傾く数字であったことから米金利が低下し、ポンドは一時1.21台まで上昇した。13日は米地銀の相次ぐ破綻による金融不安が広がり、年内複数回の利上げを織り込んでいた米金利が一転して利下げを織り込み始め、ドル売りがさらに加速。15日は欧大手金融機関への筆頭株主による追加支援がないとの報道を機に欧州で金融不安が再燃する格好に。ポンドは、ハント英財務相による「今年のリセッション入りはない」との発言に下げ渋る場面があるも、週安値となる1.2012まで下落。翌16日、複数の米大手銀行が支援に乗り出すとの報道でポンドは1.21台前半まで回復した。翌17日もリーフラーリとなり、1.22レベルで引けた。20日は、スイス大手銀の買収にかかるAT1債の無価値化による動揺からリスクオフによる下落で1.21台後半でオープンしたものの、買収の進展や主要国中銀によるドルスワップ協定関連の報道が安心材料となり、ポンドも1.22台後半まで上昇。翌21日は、欧州当局が金融システムの安定性を強調したほか、独金利の上昇も背景にユーロ全面高で推移。一方でイエレン米財務長官による預金保護を撤回する発言によりドルが優勢となり、ポンドは対ユーロ、対ドルの両方で売られ一時1.22を割り込んだ。22日は英2月CPIが予想を上回り、翌日のBOE金融政策決定会合での+25bp利上げの蓋然性が高まり、ポンドは一時1.23台まで上昇。翌23日にはBOEによる利上げが予想通り+25bpで発表され、1.22台後半で翌日に渡った。24日は再度欧州銀行株が下落しリスクオフとなり、ポンドも1.22台前半まで下落。週明け27日は、米当局による銀行向けに緊急融資ファシリティー拡張など銀行支援策検討との報道や、米中堅銀行による今月上旬に破綻した米地銀の買収合意が発表されたことなどが安心材料となり、欧州株がリーフラーリとなる中でポンドも底堅く推移した。

■ 今月の見通し

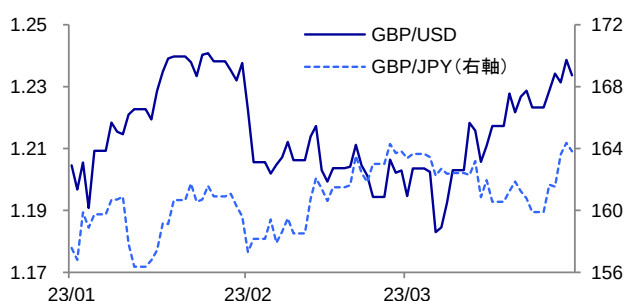
今月のポンドは上値重いながら高値圏での推移を予想する。今月は英中銀の金融政策委員会は行われず、次回は5月11日。前回3月の会合後の会見においてガイダンスの修正はなく、引き続き追加利上げの余地を確保した形だ。金利先物市場では、サプライズとなった英2月CPIの上振れもあり、更なる+25bp利上げが織り込まれ始めている模様。一方、引き続き英国内では「Cost of living」高騰についてのヘッドラインが目立つ。一部調査では3月の食品価格は15%上昇しており、食品のインフレーションは前年比17.5%と一層加速している。ペイリー英中銀総裁は、英2月CPIの上昇については一時的なものでインフレは夏頃から急速に減速し、年内に4%以下まで低下するだろうと発言している。しかし労働市場も未だタイトで、賃金も高止まりしており、今月のCPIでも強い数値が出る展開はポンドのアップサイドリスクとなる。唯一、4月に予定されていた光熱費補助金のカットは7月に延期されることとなり、これによるエネルギー価格の低下はインフレ減速や景気改善に寄与するだろう。英中銀も2Q GDP成長率予想を小幅プラスに上方修正している。ただしそれらの影響も限定的で、英経済については引き続き停滞が予想されている。また先月後半は金融不安が市場を左右し、月末にかけて市場心理としては改善されたが、高金利が続く限り再熟リスクは残り続ける。その点、英金融セクターは大規模な金融機関によって構成されていることから相対的に安定していると考えられており、ペイリー英中銀総裁もその安定性を強調している。直近の欧州金融不安ではポンドも売られたため、再度問題が表面化した際にはリスクだが、状況によってはポンド優勢になる展開も視野に入れた。なおテクニカル面では昨年末から続いているレンジの高値圏に入っており、年初来最高値を試すと同時に上値抵抗線となっている1.24レベルでの攻防も注目される。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で感じた日本との一番のギャップ』
Jと過ごした最後の夜は、通いなれたいつものバブだった。しとしと冷たい雨の降るその日、バブでは飲みなれたエールから始まり、濃いめのジントニックやショットが次々と続き、南南東を指していたはずの時計の短針は、僕らが水溜まりを軽々と跨ぐかのようにあつという間に、線対称の位置へと移動していた。Jとのしばしの別れを惜しんだ後、僕は電車に乗り帰路についた。気が付くと、降りる予定の一駅先の駅のホームでうずくまり、目の前には季節外れの打ち上げ花火が舞っていた。「これ、覚えてありますか？」早朝、美容師のMから連絡が入った。前日、僕はCanary Wharfに勤めるNが住むフラットに招待されていた。パリコレに出演するモデルたちと変わらぬ頻度でロンドンとパリを行き来し、その度に新調されるワインボトルに囲まれながら、僕はNの準備したオードブルや鍋に舌鼓を打った。身体が温まり小さな船着場を眺めることのできるバルコニーへ移動すると、顔を赤らめたKは兄弟船をロずさみ、美容師のMは遠く群馬の田舎に思いを馳せながら、巻き煙草をふかす。いつの間にか酒は進み、僕は眠りについたはずだった。翌朝、早朝にNの家を後にすると外はいつものように雨ながら、公園に咲く桜の花びらが一部散り、緑の芝生に映える朝だ。あれは僕だったのだろうか。見つかるはずのない一片を記憶の霧の中で探りながら電車に乗り込んだ。「Mind the Gap」。霧の向こうに大きな崖が現れた。崖の向こうに見えるのは、桜の木の下を新品の制服で歩く中学生の僕だった。

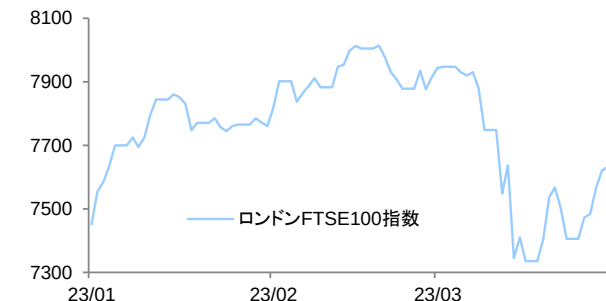
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	製造業PMI	2月	49.2	49.3	47.0
3/3	サービス業PMI	2月	53.3	53.5	48.7
3/6	建設業PMI	2月	48.6	54.6	48.4
3/10	鉱工業生産(前年比)	1月	-4.1%	-4.3%	-4.0%
3/10	GDP(前月比)	1月	0.1%	0.3%	-0.5%
3/14	ILO失業率	1月	3.8%	3.7%	3.7%
3/22	消費者物価指数(前年比)	2月	9.9%	10.4%	10.1%
3/23	英中銀政策金利		4.25%	4.25%	4.00%
3/24	小売売上高(含自動車/前年比)	2月	-4.7%	-3.5%	-5.1%
3/24	製造業PMI	3月	49.7	48.0	49.3

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6550 ~ 0.6950
AUD/JPY 86.00 ~ 92.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

3月の豪ドルは上旬は0.67台中心に推移後、RBA会合後の声明文がハト派と捉えられ、0.67台から0.65台まで下落。月半ばから後半にかけては銀行セクターの混乱不安が高まり豪ドルは上値を押えられた。第一週、軟調な豪10～12月期GDPや豪1月CPIを受けて0.6695へ下落したが、堅調な中国2月PMIや上海株上昇を受けて買い戻され、月間高値0.6782まで上昇。その後は米2月ISM製造業景気指数で支払価格が上昇し、インフレ懸念から米金利が上昇し、ドル買いで上値を抑えられた。第二週は中国全人代で今年の成長目標が控えめな5.0%前後に設定された事等から、人民元が軟調に推移し、豪ドルも売りとなり0.67台前半まで下落。RBA理事会では事前予想通り+25bp利上げを決定し政策金利を3.60%とするも、声明文がハト派的と解釈され、豪ドル安の展開となり0.67近辺まで下落。パウエルFRB議長が利上げ再加速検討を示唆するタカ派的発言をしたことで米株が売られ、豪ドルは0.65台後半へ下落した。その後は軟調な中国2月CPI・PPIや、米新規失業保険申請件数等の増加を背景に、0.66を挟みもみ合い。10日、米2月雇用統計では雇用者数が増加した一方で失業率の悪化などが次回+50bp利上げ観測を後退させ、ドル売りで反応。豪ドルは0.66台半ばまで上昇した。しかし週半ばに欧州大手銀行の経営不安を背景にリスクオフの流れが加速。豪ドルは0.65台後半まで下落。週後半は豪2月雇用統計で失業率が約50年ぶりの低水準と堅調な結果となり、加えてスイス中銀が欧州大手銀行に対する流動性支援策を発表し、安堵感から豪ドルは0.67台を回復した第四週は週半ばまで0.6650～0.6759のレンジで推移するも、24日は欧州中心に銀行セクターへの不安が再燃し、0.6625まで下落した。第五週は豪2月小売売上高が軟化し、高金利環境下で家計消費が鈍化した事を示唆。また豪2月CPIが6.8%へ鈍化した事で、インフレがピークに達したとのRBAの見解を裏付ける結果となり、足元の利上げ織り込みはRBA4月会合で据え置きに傾斜した。豪ドルは0.66台後半へ値を落とし、その後は月末・四半期末のリバランスフロー等で0.67を挟んで振幅した。

■ 今月の見通し

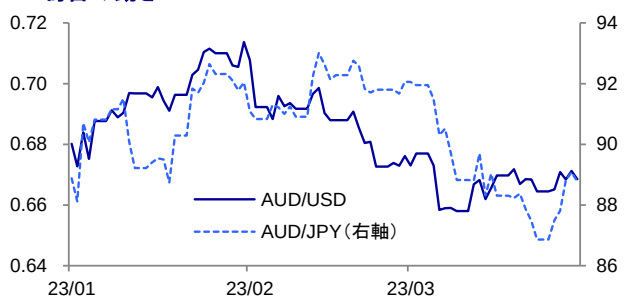
今月の豪ドルは0.65台後半から0.67台後半のレンジ中心での推移を予想する。RBA議事録要旨(3月会合分)では「委員会メンバーは利上げを停止すれば経済見通しを再検討する時間的余裕ができる」として、4月会合で利上げ停止の論拠を再検討する事で合意した。停止時期はデータと経済見通し次第」としていた。3月末にかけて発表された豪2月小売売上高では高金利環境下で個人支出がスローダウンしている事を示唆。また豪2月CPIインディケーターが鈍化し、インフレ圧力が軟化している事から、RBAの見解を裏付ける結果となり、次回4月の豪金融政策決定会合で豪政策金利を据え置く可能性が高くなった。

一方、FRBにおいても3月FOMC会合で市場予想通り+25bp利上げされたが、直近の金融セクターの混乱を受けて声明文の文言が変更され、利上げ停止の選択肢を残した形となった。FOMC声明文で利上げ停止への期待が高まったが、足元ではコリンズ・ボストン連銀総裁(非投票メンバー)やカシュカリ・ミネアポリス連銀総裁(投票メンバー)等、複数のFRB高官が「追加利上げが必要」との見解を示し、「インフレを2%目標に戻すことにコミット」しているとの発言が相次いでおり、まだFRBによる金融政策軌道は確定していない。次回5月のFOMC会合までにはまだ精査するデータも多々あり、4月は米指標結果や外部環境とFRB高官発言の方向性の擦り合わせが行われる時間だと考える。

現在足元では4月の豪金融政策決定会合で政策金利の据え置き期待が高まっており、豪ドルは頭を押えられ易くなっている。加えて、銀行セクターの混乱への懸念は幾分和らいだものの、完全にリスクが拭えたわけではない為、リスクセンチメントが豪ドルの重しとなる場面が再度出てくると見る。一方で、中国3月PMIでは景気が上向いている事が示唆されており、中国の景気動向が引き続き改善する事で豪ドルがサポートされる期待や、米国でもインフレ関連や個人消費が落ち着いてくることにより、米国利上げ停止期待の高まりを背景としたドル売りの流れから、豪ドルが下支えされる可能性も十分にある。因って、豪ドルが一方へ動く材料が出揃うには時期尚早であるため、4月は豪政策金利据え置きの後、レンジ推移する可能性が高いとみる。引き続き、発表データを精査し進展を見守りたい。

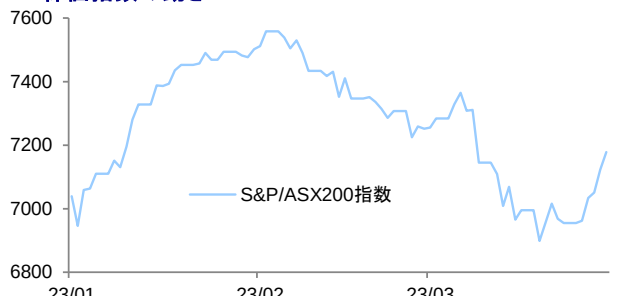
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
3/1	GDP(前年比)
3/1	CPI YoY
3/7	貿易収支
3/7	RBAキャッシュレート
3/16	失業率
3/16	正規雇用者数変化
3/16	非常勤雇用者数変化
3/21	RBA議事録要旨発表
3/28	小売売上高(前月比)
3/29	CPI YoY

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
4Q	2.70%	2.70%	5.90%
Jan	8.1%	7.4%	8.4%
Jan	AS\$12250m	AS\$11688m	AS\$12985m
Mar	3.6%	3.6%	3.35%
Feb	3.60%	3.5%	3.7%
Feb	-	74.9k	-42.4k
Feb	-	-10.3k	31.5k
Mar			
Feb	0.2%	0.2%	1.8%
Feb	7.2%	6.8%	7.4%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.3300 ~ 1.3850
CAD/JPY 93.00 ~ 100.00

米州資金部カナダ室 柏木 広樹

■ 先月の為替相場

3月は1.36台前半でスタート。3日にUAEがOPEC脱退の協議をしているとのニュースを受け原油相場が急落、産油国通貨であるCADは一時1.3557まで下落し、これが3月のUSD/CADの最安値となった。ただその後、月初にかけてUSD/CADは上昇する展開となった。7日に米国でパウエルFRB議長の議会証言が行われたが、議長のタカ派発言が米国とカナダの金融政策のスタンスの違いを際立たせ、USD買いが強まりUSD/CADは1.3760まで大きく上昇する展開となった。また更に翌日8日、カナダ中銀の政策金利が予想通り4.5%に据え置かれたため、USD/CADの上昇は止まらず、10日のオーバーナイトで昨年の10月以来となる1.3859まで上昇した。しかし同日、米2月雇用統計の平均時給の伸びが予想を下回ったこと、一方のカナダ雇用統計では平均時給が予想を上回ったことがUSD売りCAD買いにつながりUSD/CADは1.3766まで反落し、1.3859が3月の最高値となった。

月半ばでは、米国地銀2行の破綻を契機とした金融システムへの不安が相場の中心材料となった。14日には金融システム不安から米国の利上げ期待が後退し、USDが売られUSD/CADは1.3653まで下落。一方、その翌日15日はクレディ・スイスの経営不安が高まり、リスク回避のUSD買いが進み、USD/CADは1.3814まで反騰するなど値動きの荒い状況が続いた。

月末にかけては、金融システム不安のリスク回避によるCAD売り、米国とカナダの金利差縮小によるCAD買いが交錯しながら、USD/CADは金融システム不安の落ち着きとともに下落する展開となった。21日にはカナダの2月CPI、22日には米国FOMCで25bpの利上げが発表されたものの、従来ほど大きな値動きの材料とはならず、その一方で24日にドイツ銀行のCDSが大きく上昇した際は、リスク回避の動きでUSD/CADは1.3804まで一時的に大きく上昇する局面が見られた。

■ 今月の見通し

21日に発表されたカナダの2月CPIは、総合では前年比+5.4%（前月同+5.9%）へ低下したが、コアCPIは前年比+4.8%（前月同+5.0%）と減速ペースが鈍り、インフレが根強いことが確認された。この傾向は米国と同様であるものの、カナダ中銀は借入依存度が高い家計への影響や、利上げの効果が十分に発揮されるには時間を要することを理由として1月を最後に利上げの一旦停止を表明し、8日に発表した政策金利は表明通り4.5%に据え置きた。一方でFRBは当時、パウエルFRB議長が議会証言で従来予想以上にターミナルレートが高くなる可能性も示唆していた。その結果、3月上旬には両者の金融政策のスタンスの差が際立ち、両国の2年債の利回り差は75pb程度まで拡大する場面があり、USD/CADも1.3859の高値をつけた。

当初は、この両国の金利差が、USD/CADの上値を暫くサポートをすると想定されたが米国地銀2行の破綻を発端とした金融システム不安によって、市場は今年中の利下げも織り込みはじめ、両国の金利差は縮小してきている。また金融システム不安が高まった際にはリスク回避の動きとして、WTI原油先物の下落と同時にCADも売られる場面もあり、USD/CADの値動きの材料に変化が出てきている。

今月の見通しであるが、中央銀行の金融政策の差に焦点が当たっていた先月とは異なる展開を想定する。再び金融システムへの懸念が高まり、リスク回避の動きが強まれば一時的にCADが売られる局面も考えられるが、2月からUSD高/CAD安をサポートしてきた両国の金利差も縮小し、22日のドットチャートで示されたようにFRBの利上げ回数もあと1回とほぼ見通しが固まってきた中、USD/CADは上値が抑えられることが考えられる。3月のUSD/CADレンジを1.33~1.385と予想する。

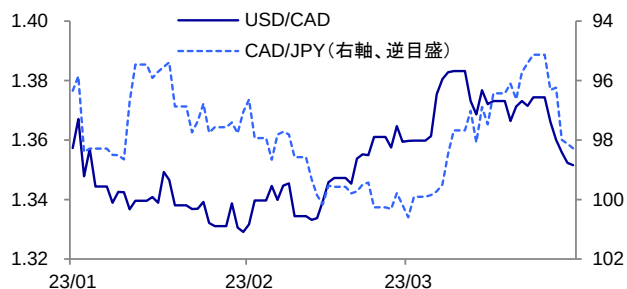
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で感じた日本との一番のギャップ』
一番のギャップは、雨の日でも傘を差す人が少ないということです。私たちの支店があるトロントは、カナダ東部に位置しています。カナダ国内の他の都市と比較をすれば、それほど寒い都市ではありませんが、冬はマイナス20~30℃を記録することもあります。夏は30℃を超えて日本のように蒸し暑くなる日もありますが、暑すぎず比較的過ごしやすい日が多いです。雨は日本のように一日中降り続けることは稀ですが、年間を通して雨が降ります。

日本では、雨が降ったら傘を差すと思います。雨が降るかもしれないと天気予報が出たら、多くの人が傘または折りたたみ傘を持って出かけることが一般的かと思います。しかしカナダでは傘を差している人が全くいないという訳ではないのですが、雨が降っているのに傘を差さずに歩いている方が普通の光景です。カナダも広いので雨量が多い西部の都市バンクーバーなどは状況がやや異なるかもしれませんが、トロントでは雨が降っても、雨がすぐに止むことが多く、降雨量も日本には多くないため、上着のフードをかぶって速足でやり過ごす人が多いです。私もすっかり雨の日でも傘を差さなくなりました。

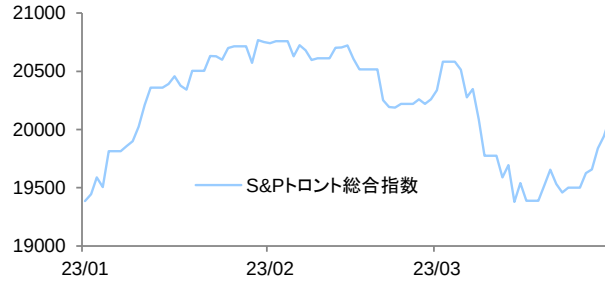
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	S&P Global カナダ製造業PMI	2月	-	52.4	51.0
3/10	雇用ネット変化率	2月	10.0k	21.8k	150.0k
3/10	失業率	2月	5.1%	5.0%	5.0%
3/15	住宅着工件数	2月	220.0K	244.0K	216.5K
3/17	鉱工業製品価格(前月比)	2月	0.2%	-0.8%	0.3%
3/21	CPI 季調前(前月比)	2月	0.5%	0.4%	0.5%
3/21	CPI (前年比)	2月	5.4%	5.2%	5.9%
3/24	小売売上高(前月比)	1月	0.7%	1.4%	0.0%
3/31	GDP(前月比)	1月	0.4%	0.5%	-0.1%
3/31	GDP(前年比)	1月	2.9%	3.0%	2.3%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1280 ~ 1340
 KRW/JPY 9.901 ~ 10.526
 JPY/KRW 9.500 ~ 10.100

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

3月のドル/ウォン相場はやや上値の重い展開。2月末には1,326.6ウォンまで上昇していたドル/ウォンは、月末の実需のウォン買い等に押され2日1,318.0ウォンにてオープン。ウォンの実需面は2月韓国貿易収支(▲53億ドル)の通り芳しくない状況に変わらないものの、ここもとの非常に速いドル/ウォン上昇に一定程度の調整売りが入り、7日にかけて下落する展開となった。しかし8日海外時間にパウエルFRB議長が上院議会証言にて「今後のデータ如何によって金利引上げ速度を速める可能性がある」と発言すると、米金利は中期ゾーンを中心に急騰。市場全体でドル買いが強まる中、ドル/ウォンは9日に月高値1,329.0まで上昇した。しかし、10日海外時間に米地銀SVBの破綻を受けて、米金利が中期ゾーンを中心に20bp以上の大幅低下となり市場全体で強烈なドル売りとなる中、ドル/ウォンは節目の1,300を割り込んだ。さらにクレディスイスにも「重大な弱点」があるとの報道が出る中、米金利は乱高下しつつも下落。リスクオフムードの中、韓国にも外国人投資家による株売りが入る中、16日のドル/ウォンは再び1,310台まで上昇したものの、スイス中銀がクレディスイスに対し最大500億フランの流動性を供給する旨を発表したほか、ECBが予定通り50bpの利上げを行ったこと等あり、徐々に米金利は上昇し、株式市場も反発。19日にはUBSがクレディスイスを救済買収するとの報道が出たことから、銀行システムへの懸念は徐々に後退。さらに22日FOMCでの25bp利上げは予想通りではあったものの、早ければ5月にも利上げ停止の可能性を示唆するパウエルFRB議長の会見を受けて、市場はFRBのハト派寄りスタンスへの転換と解釈しドル売りが進行。ドル/ウォンは週安値1,276.5まで下落した。しかし、韓国企業による配当フローが本格化する中、月末になってもウォン売り圧力は収まらず、結局、前月比21.1ウォン下落した1,301.9にてクローズ。

■ 今月の見通し

4月のドル/ウォンは底堅い展開を予想する。

4月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。

①インフレ推移と米FEDによる金融政策、②BOKによる金融政策

①3月FOMCでは25bpの利上げ(4.75%→5.00%)が実施されたものの、足許の銀行システム不安もあることからパウエルFRB議長の会見ではハト派色が強く出る展開。早ければ5月にも利上げ停止、年内の利下げ開始が期待されるなか、ドル売りが進みやすい展開だ。しかしながら米当局による預金保護の姿勢は固く、他の地銀への波及懸念は後退しつつある。加えて、足許の労働及び住宅需給は底堅いままであることを勘案すると年内の利下げ見込みが剥落する可能性も十分あり、再びドル買いになる可能性も否定できないだろう。

②2/23にBOKは政策金利(3.5%)を据え置き。足許の米金利低下などもあり市場では今年後半の利下げ開始を見込む状況だ。足許の貿易収支は弱く、加えて韓国企業による配当が多い4月以降はウォン売り圧力が強く、ウォン買い材料を探すことが難しい。1,300台のウォン安は当局にとって許容範囲になっていることからドル/ウォンを底堅くする要因となろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で感じた日本との一番のギャップ』

当地で感じた一番のギャップですが、4年半も韓国に住んだので何も感じなくなってきたというのが正直な感想です。。。

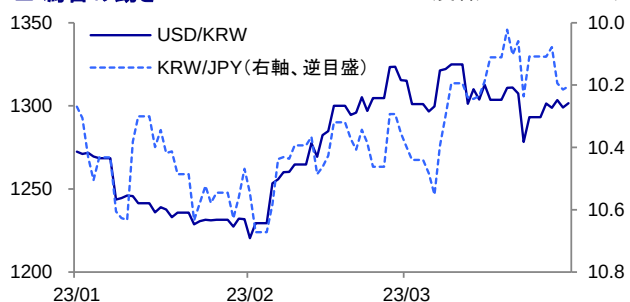
「辛いラーメン」とメニューに書かれていたのに注文したら十分辛かったことも、マイナス15度の真冬の朝にスタバでコーヒー頼んだら何も聞かれずにアイスコーヒーが出てきたことも(何故か韓国人はこれを外で飲む、、)、韓国語学校では日本語が分からない先生をアサインされて、韓国語で韓国語の文法を習ったことも、床屋では何も聞かれずに髪を切られるため髪型に選択の余地がなかったことも、全て良い思い出です。

文化的な違いを感じることもありましたが、基本的に生活しやすい国だったと思います。私は3月末をもって日本に帰りましたが、そんな韓国で生活できてよかったと感じております。

来月以降は後任の山内さんがコメントを書く予定です。引き続き応援よろしくお願いします。

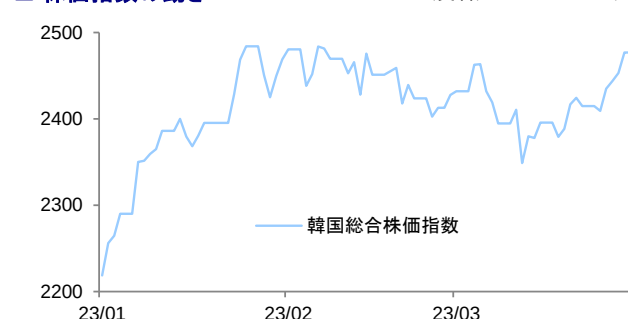
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	貿易収支	2月	-6,011M	-5,300M	-12,511M
3/1	輸出(前年比)	2月	-8.8%	-7.5%	-16.4%
3/1	輸入(前年比)	2月	4.1%	3.6%	-2.7%
3/6	CPI(前月比)	2月	0.4%	0.3%	0.8%
3/7	GDP(前期比)	4Q	-0.4%	-0.4%	-0.4%
3/15	失業率	2月	3.0%	2.6%	2.9%
3/21	PPI(前月比)	2月		4.8%	5.1%
3/29	消費者信頼感	3月		92	90.2
3/31	鉱工業生産(前年比)	2月	-7.5%	-8.1%	-13.0%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.00 ~ 30.70
TWD/JPY 4.28 ~ 4.40

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

3月のドル/台湾ドルは利上げ警戒から上昇するも、米地銀の破綻後は一転して下落に。

月初の3月1日は連休明けであったが、連休期間のドル高を受けて、30.560でオープン。その後は30.6台半ばまで上昇するも、30.6台では輸出企業のドル売りが入り、上値は押さえられ、30.60を挟んでレンジでの推移が続いた。しかし、8日はパウエル議長が議会証言でタカ派な姿勢を示したことから、ドル買いが優勢となり、30.80手前まで上昇。9日も米国の利上げ再加速への懸念からドル買いが継続し、30.8台に乗せた。

月央では、10日は前日に米地銀の経営難の報道から米株式市場が銀行株を中心に下落したことを受け、台湾株安台湾ドル安の流れとなり、一時30.893まで上昇。その週末には米地銀の破綻が相次いで報道されたことから、13日はリスクオフの流れが加速。しかしながら、米地銀の破綻の遠因となった利上げをFOMCが停止するとの思惑が強まると外資が流入。台湾加権指数は前日比プラスに戻し、台湾ドル買いが優勢となり、30.6台前半まで下落。その後は落ち着きを取り戻すも、スイス大手銀行にも経営不安が広がりを見せ、30.6付近でもみ合う展開が続いた。

月後半に入ると、FOMCが0.25%の利上げを決めたものの、パウエル議長の「利上げ休止を検討した」等会見での発言を受けて米金利は低下すると、23日はドル安の流れから30.3台まで下落。その後は月末にかけ輸出企業のドル売りから28日には一時30.290まで下落。しかし、米金利が上昇すると、ドル/台湾ドルも底堅く、30.4台に戻して推移した。

■ 今月の見通し

4月のドル/台湾ドルはレンジでの推移を見込む。

3月は、米国の利上げ継続懸念が再燃したことからドル高に進んでいたのが、一転して米地銀の破綻をきっかけにリスクオフムードが強まった。台湾株は一時下落したが、米国の利上げ織り込みも後退し資金が流入したことや、米長期金利の低下がドル売り材料となり、ドル/台湾ドルは下落する形となった。

なお、台湾中銀も金融政策決定会合では0.125%の利上げを決定。ただし、今後については明確な方向性を示しておらず、引き続き物価動向等を注視することになるであろう。

4月についてはレンジでの推移を見込む。金融不安が完全に払拭されない中、米国の利上げ期待がすぐには高まらないであろう。ドル/台湾ドルの上値は重い展開が続くと見られる一方、底値も堅いと見込む。足許の輸出は引き続き減少が続いており、貿易黒字も縮小傾向にあり、実需の台湾ドル買いも従来ほど強くはないため、結果的にレンジでの推移となるであろう。

気を付けなければいけないのは金融不安の行方か。今は、米国の利上げ見込みを後退させる要因となり、台湾への資金流入に作用している。しかし、金融不安が実体経済に影響を及ぼした場合は、輸出減少、台湾株安を招き、台湾ドルも売られる展開が想定されるため注目したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

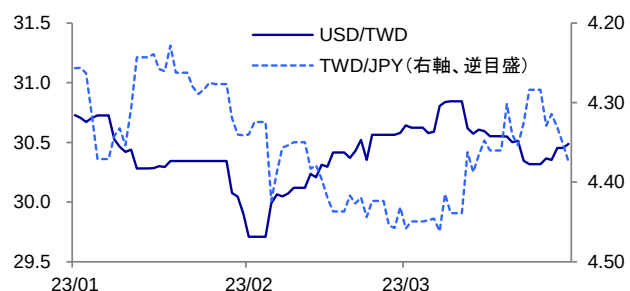
『当地で感じた日本との一番のギャップ』

日本と似ているところも多い台湾ですが、一番のギャップは街中のおいでしょうか。まずは、臭いで有名な臭豆腐。日本人は嫌いな人が多いですが、露店でも販売しているため、街中を歩いていてもその香りを嗅いでしまいます(日本では納豆が包装もされず、屋外で売られるていることはないですからね)。次は茶葉蛋。いわゆる煮卵なのですが、これをコンビニでは煮汁に入ったまま売られているので、八角特有の匂いがコンビニ中に充満しています。また、この八角は日本人だと苦手な人も少なくないですが、台湾の様々な料理に入っており、台湾らしさを感じる匂いでもあります。それ以外の香辛料も地元料理では使われるため、それらも台湾らしさを醸し出しています。

住んでいると徐々に慣れてくるため、日本から台湾に戻ったときにこれらの匂いがすると、帰ってきたと逆に感じるようになります。

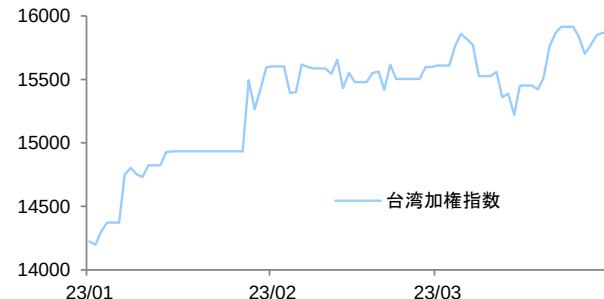
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
3/3	外貨準備高
3/7	輸出(前年比)
3/7	輸入(前年比)
3/7	貿易収支
3/7	CPI(前年比)
3/20	輸出受注(前年比)
3/23	公定歩合
3/23	鉱工業生産
3/24	失業率

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
2月	-	558.37B	557.14B
2月	-12.5%	-17.1%	-21.2%
2月	-11.8%	-9.4%	-16.8%
2月	3.92B	2.35B	2.34B
2月	2.65%	2.43%	3.04%
2月	-17.5%	-18.3%	-19.3%
1Q	1.75%	1.875%	1.75%
2月	-10.00%	-8.68%	-20.95%
2月	3.60%	3.58%	3.60%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8000 ~ 7.8500
HKD/JPY 16.20 ~ 17.30

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【3月の香港ドル直物相場】

欧米の銀行を巡る金融システム不安が市場のボラティリティを高め、米国の利上げも最終局面にあるとの思惑が強まったものの、3月の香港ドル直物相場はペッグ制の下限である7.85レベルから大きく離れずに推移した。米大手地銀が破綻となった後でも、FRBが25bpsの利上げに踏み切ったことを受けて、市場参加者が米ドル/香港ドルのキャリートレードのポジション構築を継続したことも、香港ドル直物相場が7.85レベルに張り付くことになった要因だ。しかし、中国の経済活動再開期待も根強く、香港ドル市場からの資本流出は限定的であった。ストックコネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)による香港株式市場への資金流入額は、3月に700億香港ドルに達し、堅調に推移した。一方で、金融システム不安が焦るリスクオフ相場も広がる中、IPO活動は低調なままであった。経済指標に目を向けると、1月の香港小売売上高は、旧正月による季節的要因が働き大きく改善した。一方で2月の貿易統計は、季節調整後の伸び率は顕著に低下している。中国のリオープン期待はあるものの、世界的な景気後退リスクの高まりが香港の経済回復の重石となるリスクがある。

【3月の香港ドル金利市場】

FRBの金融政策見通しの不透明化により、米ドルペッグ制を敷く香港ドル金利も上下に振れる展開となった。現在は2月につけていた低水準は上回るものの、引き続き短期金利は米ドル金利を下回っている。金利差(香港ドルHIBOR-米ドルLIBOR)は、1カ月物は▲150bps、3カ月物は▲130bps程度水準に留まった。これを見ると、欧米の金融システム不安の高まりとクレジットの縮小が目立つ中で、香港ドルの市中流動性は米ドルに比べて比較的潤沢な状況と思われる。HKMAによる香港ドル買い為替介入も入らなかった為、アグリゲートバランスは770億香港ドルと水準を変えていない。また、実際にFRBが利上げサイクルを停止した場合、米ドル/香港ドルのキャリートレードも縮小する為、香港ドル流動性が大幅に流出する恐れはなくなるだろう。香港の銀行はFRBによる25bpsの利上げ後も香港ドルのプライムレート(最優遇貸出金利)を据え置いた。FRBが近い内に利下げに転じるとの観測から、香港ドルスワップ金利は米ドルスワップ金利に追隨して低下し、3年物は2月末の4.5%から3.3%へ、5年物は4.2%から3.2%へ低下した。香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR-3年物スワップ金利)はプラス圏に転じている。

■ 今月の見通し

【4月の香港ドル直物相場】

我々は、FRBがすぐに利下げに転じるとは考えにくく、米ドル/香港ドルのキャリートレードの流れがまだ続く為、香港ドル直物相場はペッグ制の下限である7.85近辺での推移が続くものとみている。確かに、引き続き金融システム不安に端を発したリスクオフムードは続いており、欧米の銀行を巡る混乱が強まれば、FRBの利下げ織込み上昇を受けてキャリートレードが巻き戻され、香港ドル直物相場も上昇する可能性がある。一方で、中国のリオープンによる景気回復の勢いが続く限り、底堅い資本流入が香港ドル市中流動性を潤沢に保ち、香港ドル直物相場の上昇は限定的となる可能性が高い。金融システム不安に揺れる欧米市場に対し、安定した金融市場と底堅い成長が見込める対中投資市場は一部の外国人投資家にとって魅力的であり、資本流出も抑えられるだろう。2019年にFRBが予防的な利下げを実施した局面を見ると、FRBによる段階的な利下げによって香港ドルスポットがすぐにペッグ制の下限7.85から上限の7.75に動くわけではない。為替市場における香港ドルの調整はしばらく時間を要するだろう。しかし、長い期間のフォワードカーブは、FRBのスタンス転換に早期に反応すると考えられ、1年物香港ドルフォワードポイントはディスカウント800ポイント付近から反発する可能性がある。

【4月の香港ドル金利市場】

香港ドルの市中流動性が引き続き潤沢であることから、香港ドルの短期金利は米ドル短期金利を下回る水準で推移するものと考えられる。市場心理が完全に好転するにはまだ時間がかかる為、香港の株式市場におけるIPO活動は引き続き低調となり、香港ドル資金需要が高まる見込みも薄い。HKMAの大規模な香港ドル買い為替介入を通じた流動性減少も今のところは起こりにくく、各銀行は香港ドル余剰資金を金融市場で放出する傾向にある。米ドルペッグ制においては、FRBの政策金利変更の影響はまず為替市場に現れる。その後徐々に短期金利市場に波及してくる為、香港ドルHIBORの低下はFRBの利下げ実施の後、やや遅れて見えてくるだろう。

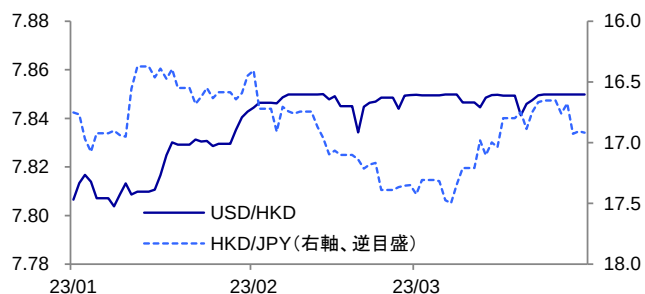
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で感じた日本との一番のギャップ』

香港の文化(食べ物やファッション、店内の装飾等)は日本の文化の影響を強く受けていますが、それでも所々で日本との違いを感じることがあります。香港に住んでいる日本人がよく言うのは、香港のエスカレーターは日本のものよりも遥かにスピードが速いのだそうです。これは、何事も香港人は日本人に比べてせっかち、ということを表しているのでしょうか。また、香港は日本に比べ外の気温は高いですが、冷房が強く屋内はかなり涼しいことが多いです。私のオフィスでも。日本人のスタッフはよく上着を着て仕事をしています。夏場のショッピングモールや公共交通機関は冷房で風邪を引きやすいので、注意しましょう。

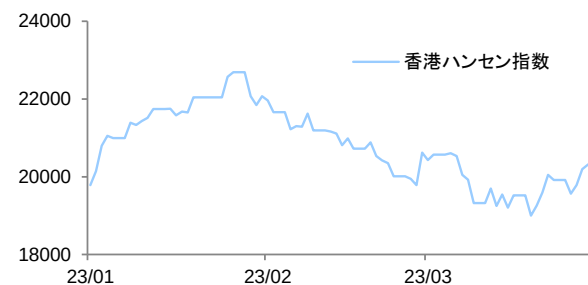
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/2	小売売上高(価額、前年比)	1月	4.5%	7.0%	1.2%
3/3	S&P Global Hong Kong PMI	2月	-	53.9	51.2
3/7	外貨準備高	2月	-	\$429.1b	\$436.5b
3/14	PPI(前年比)	4Q	-	-0.4%	0.4%
3/14	鉱工業生産(前年比)	4Q	-	-0.1%	-0.5%
3/16	失業率(季調済)	2月	3.3%	3.3%	3.4%
3/21	CPIコンボジット(前年比)	2月	2.4%	1.7%	2.4%
3/27	輸出(前年比)	2月	-28.0%	-8.8%	-36.7%
3/27	輸入(前年比)	2月	-23.0%	-4.1%	-30.2%
3/27	貿易収支(HKD)	2月	-30.0b	-45.4b	-\$25.4b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.7000	～	6.9500
	CNY/JPY	18.00	～	20.30
	100JPY/CNY	4.9300	～	5.5500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

USDCNYは一時年初来高値を更新も、月足では小幅に下落。

3月は6.93台でオープン。1日に発表された中国PMIの堅調な結果が元高サポートとなり、6.86レベルまで大幅に下落。その後は米金利上昇を背景に再びドル買い優勢となる動きや、全国人民代表大会で発表された23年度の成長率目標が5%前後と引き下げとなったことを受けた元売りがUSDCNYのサポートとなり反発。7日にはパウエル議長の議会証言でのタカ派な発言にドル買いが強まり6.97台へ。8日に6.9782をつけて年初来高値を更新した。

しかし、米地銀経営破綻を発端とするリスク回避的な動きからドル売りが加速し、13日には6.83台まで急落。6.90近辺まで自律反発後、15日に発表された国内主要統計は結果こそ好感されたものの相場への影響は限定的で6.88近辺で方向感を探る展開。

LPRは据え置きで無風、その後はFOMCを控えてレンジ相場。FOMCにおいては金融不安を背景とした景気・インフレへの影響に言及されたこともあり、市場はドル安で反応、23日には一時月中安値となる6.81台へ下落した。しかし、それ以上に下値を試す展開とはならず、FOMC前の水準をすぐに回復すると月末にかけては6.88近辺を中心とした推移となった。

■ 今月の見通し

USCNYは上値重い推移をメインシナリオとしたい。

3月初に公表された全人代の内容は特段サプライズはなく、為替・金融政策についても「人民元相場を基本的に安定維持することを目指す」「積極的な財政政策と穏健な金融政策の方針」を改めて表明する形となった。現段階でPBOCの金融政策に大きな方向転換も想定されず注目度が相対的に低下していることから、為替市場においては人民元主導でUSDCNYの方向感に影響を与える環境にはなっておらず、ドルインデックスとUSDCNYスポットに高い相関が見られるように、足元ではドル主導の相場展開が継続している。

米地銀破綻に端を発する金融不安というトピックは、引き締め環境下でも底堅さを見せていた米労働市場や物価市場に対抗すべくタカ派スタンスを強めていたFEDを弱気にさせるひとつのファクターとなったことは確かであり、市場が早期利下げを織込む動きに拍車をかけた。米利上げはターミナルレート到達が迫る中で、想定以上の強い経済データ発表が続かない限り、USD高がさらに強まることは想定しづらい。

また、中国サイドに目を移せばゼロコロナからの移行を終えた中国国内経済への回復期待から、これまで流出を続けていた証券投資フローの流入増が想定される。ストックネットを通じた北向き(香港から上海・深セン)フローは急速な流入を見せている。債券では先進国の国債利回りの高さもあり、外国人による流入の動きは限定的であるが、中国当局の景気支援策を受けて実体経済データや不動産セクターの回復が確認されてくれば、流入フローの後押しになることも想定される。

相場に織込まれていない事象として、米中対立や地政学的リスクの顕在化には留意しておきたいが、ドル主導の相場地合いにおいてはUSDCNYの上値重い推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で感じた日本との一番のギャップ』

何をするにもスマホ必須という点が一番のギャップだと思います。

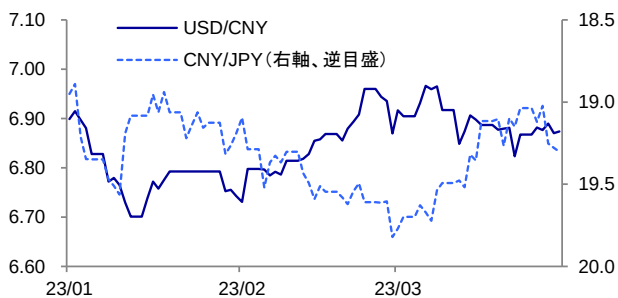
中国はスマホがもはや身分証としての役割を果たし、民間のサービスに留まらず、公的サービスにおいても基本的にはスマホ内のミニアプリを使用することがすべての人の行動の前提になっています。特にコロナ期間中はそれを肌で感じるようになりました。

すべてスマホで完結できるというのは本当に便利です。今では国内出張において飛行機・高速鉄道等で紙の切符やチケットを受け取ったり、提示したりすることはほぼありません。どんな店でもQRコード支払いができることが前提で行動しているため、ここ数年は私は財布に現金を1元も入れていません。ただし、スマホを無くしたら即アウトというリスクも負うことになりました。。

先月、日本に一時帰国した時はクレジットカードをメインで使用していました。日本にいる時は何も感じなかったですが、今では暗証番号を入力する事も面倒くさいと思ってしまうようになりました。いつか来る帰国に備えて、少しずつ戻していかなければ、、と思った次第です。

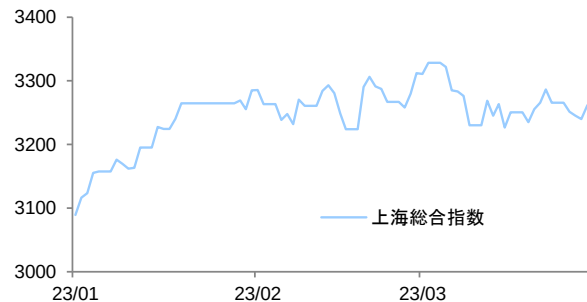
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	製造業PMI	2月	50.7	52.6	50.1
3/1	非製造業PMI	2月	54.9	56.3	54.4
3/9	PPI(前年比)	2月	-1.3%	-1.4%	-0.8%
3/9	CPI(前年比)	2月	1.9%	1.0%	2.1%
3/15	小売売上高(前年比)	2月	3.5%	3.5%	-
3/15	工業生産(前年比)	2月	2.6%	2.4%	-
3/15	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	2月	4.5%	5.5%	-
3/20	LPR1年物	-	3.65%	3.65%	3.65%
3/20	LPR5年物	-	4.30%	4.30%	4.30%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3000 ~ 1.3550
SGD/JPY 96.50 ~ 103.00

アジア・オセアニア資金部 森谷 友一

■ 先月の為替相場

3月のUSD/SGDは軟調推移となった。

月初1日にUSD/SGDは1.34台後半で取引を開始すると良好な中国の経済指標の結果を受けて1.33台後半まで下落も、海外時間においてFRB高官によるタカ派発言を受けて下げ幅を縮小。2日もUSD買いの流れが続き一時1.35台まで上昇も3日に発表された中国2月サービス業PMIが上振れるとUSD/SGDは伸び悩む展開となった。7日はパウエルFRB議長の議会証言におけるタカ派発言を受け大きくUSD高が進み1.35台後半まで上昇した。しばらく方向感に欠ける推移が続いたが10日は米2月雇用統計において賃金の伸び率鈍化が材料視されたことや米銀の経営破綻も相俟って1.34台前半まで下落する局面も見られた。

13日から14日にかけては1.34台を中心したもみ合いが続いたが、15日はスイス大手銀行の財務問題を背景にリスクオフの動きが強まるとSGD売りが優勢となり1.35台を回復する展開となった。しかし、欧米金融機関の信用危機をめぐる警戒感から米金利低下、USD売りの動きが強まると17日の海外時間終盤には1.34ちょうどを割り込んだ。

信用危機への懸念が意識され米金利が低下基調で推移する中、USD/SGDはじり安推移が続いた後、22日のFOMCの内容がハト派と解釈される内容だったことやイエレン米財務長官の預金保険の上限引上げは検討していないとの発言を受けUSD安が進み1.32台前半まで下落。24日は良好な米経済指標に加え、FRB高官よりピーク金利見通しの引上げを示唆する発言を受けUSD買いが強まると1.33台半ばまで上昇した。

28日は経営破綻した米銀の買収がまとまったことを受けリスクセンチメントが改善するとSGD買いが強まり1.32台前半まで下落。その後は下げ止まり1.32台後半から1.33台前半でのみみ合い推移が続いている(30日時点)

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は上値の重い推移を予想する。

昨年後半から続いてきたUSD安SGD高の流れが2月は一旦落ち着いたように見えたが、先月は再びUSD安が進行する展開となった。USD安の流れが再開した要因としては米欧金融システムの信用危機をめぐる警戒感が高まったことを受けて今後のFRBの利上げ幅が想定より小さくなるとの見方が強まったことがあげられる。米欧の金融システムに対する不安については相次いで救済策が発表されていることから足元では過度な警戒感こそ後退している状況ではあるものの、金融不安が実体経済に与える影響を見極める段階が当面は続き、関連ヘッドラインに神経質になる展開が続くことが想定される。3月のFOMCでは一部では金融システム不安を背景に利上げ停止観測も浮上してはいるが結局25bpの利上げには踏み切ったが、金融システム不安が払拭されない中では米金利上昇圧力はかきりづらくUSD買いは控えられやすいと予想する。

今月は10-14日にかけて開催されるMAS会合に注目が集まる。昨年MASは政策バンドの傾斜の引き上げと中央値引上げを複数回に渡って実施しており、強いタカ派姿勢を示していたが、次回4月会合に向けても市場においては相応の引き締め期待があることが想定される。先月の値動きについてはUSD売りの側面が強いとは考えているものの、MASへの金融引き締め期待もUSD/SGDの下落要因の一つではあったと考えられ、引き締めスタンスが示されるようであればSGD買い要因となりそうだ。

注目されるMAS会合においてこれまで続いてきたタカ派スタンスの転換が示された場合や、早期に金融システム不安が払拭され米金利上昇につながるようなケースとなれば再度USD高方向に振れる可能性はあるものの、メインシナリオとしてはUSD/SGDは上値の重い推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で感じた日本との一番のギャップ』

4年ほど当地にいと、既に「郷に入っては郷に従え」の気持ちでギャップを受け入れてしまっているのですが、今回は最近着任した人の協力も得て何人かにヒアリングしてみました。

「ラーメンが美味しいけど高い」 当地も日式ラーメン屋は数多あり、バリエーションも豊富。有名店では、日本人に限らず、むしろ現地の方々の方が多くくらい列をなして並んでます。中にはラーメン好きがこうじて、日本で修業して、シンガポールでお店を開いた強者まで。ただ、1杯で十数ドル、トッピングを乗せると20ドル近く。小職着任時は、1SGD = 80円前後でしたが、足元では100円近く。確かに日本とのギャップは相応にありますね。

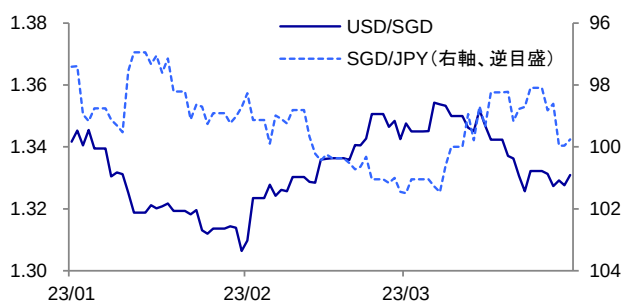
「意外と涼しい」 赤道直下の北緯1度にあり、年中夏ですが、日本ほどのうだるような暑さはあまり感じません。湿気も高いのですが、海風も入り、中心部以外には結構緑地も多いので、体感的には過ごし易さはあります。熱帯域特有のザッと降る雨のおかげで、20度前半くらいまで下がることもあれば、随所に屋根もあり、直射日光を浴びる機会も少ないです。ただ、気が付けば日焼けはしています。

「洗面所に電源がない」 こちらは女性目線からでの声でした。ご指摘の取り、小職も着任時に困った事の一つでしたが、鏡の無い所でドライヤーすると、乾きはするもののボサボサしたまんま。湿気と電圧の高さから、安全を配慮して電源がないみたいです。

(アジア・オセアニア資金部 福田)

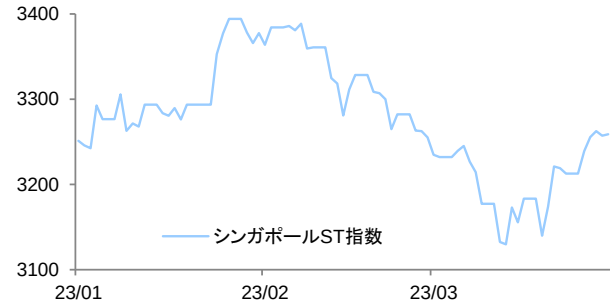
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/3	小売売上高(前年比)	1月	4.9%	-0.8%	7.7%
3/17	非石油輸出(前年比)	2月	-15.8%	-15.6%	-25.0%
3/23	CPI(前年比)	2月	6.4%	6.3%	6.6%
3/24	鉱工業生産(前年比)	2月	-1.8%	-8.9%	-3.1%

タイバート相場

予想レンジ: USD/THB 33.80 ~ 35.10
THB/JPY 3.78 ~ 3.90

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

3月のドルバートは下落。35バート前半で取引を開始し、予想を上回る中国の経済指標を好感して堅調な滑り出し。早々に35バートを割り込んだものの、翌週にパウエル議長の議会証言や、米2月雇用統計を控えていたためレンジ内で推移。パウエル議長の証言は、利上げの加速を示唆するようなタカ派な内容だったため、米2年債利回りが遂に5%台に到達。年内の利上げ到達点予想も5%後半へと引き上げられ、ドルバートは35バートを回復。しかし、9日から経営上の不安が報じられていた米地銀が翌10日に経営破綻する事態になると、急速にセンチメントが悪化。当初はドル買いで反応したものの、質への逃避で米債利回りが急激に低下し、34バート後半へ下落した。

中旬、米地銀の破綻に関して預金者保護や流動性供給の対策が取られたが、今度はスイス大手金融機関の経営不安を意識させる報道が舞い込み、34バート半ばへと下げ幅を拡大。米地銀のケースと同様にスイス中銀による支援表明等収束に向けた対策が直ぐ講じられたことで一旦ドルバートは下げ渋るも、米金利の低下基調や米期待インフレ率の低下が確認される中で34バートちょうど付近までドル安が進んだ。

下旬、タイ下院が総選挙に向けて解散されると、世論調査で有力な首相候補者が最低賃金の大幅引き上げを公約に掲げているため、コスト増がタイの輸出競争力を削ぐとの懸念からFOMC前に34バート半ばへと上昇。22日の3月FOMCでは一連の米地銀破綻の問題から利上げ停止も検討したとパウエル議長より発言があり、米短期金利が低下。また、イエレン財務長官の預金保険の保護対象拡大に対する見解が日々変化したこともあって市場の警戒感が後退しづらく、全体的にドル安が進んで34バートちょうど近辺で推移。月末週は破綻した米地銀を他の地銀が買収で合意したとの報道からリスクオンに転じ、米金利の上昇にもサポートされるが、34バート台半ばでの滞空時間は短く、タイ中銀のMPCは事前予想通りの0.25%pt引き上げだったことで大きな影響は見られなかった。月末・四半期末の実需の売買が入ってくると再びレンジ推移となり、30日は34バート前半でオンショア市場を終えた。

■ 今月の見通し

4月のドルバートは上値の重い展開がメインになると予想。非常に強い米1月雇用統計で始まった2月以降のドル高相場は、3月に入って米地銀の破綻やスイス大手金融機関の経営不安報道を受けて一旦幕引きとなった。

欧米の金融機関に対する信用不安が報じられて以降、3/16のECBを皮切りにFRB、BOEと利上げを続けてきた欧米主要中銀の会合が開催され、3中銀いずれも利上げを行ったものの、これまでの会合とは違って今後の金融政策の見通しには慎重な色合いが濃くなったと感じられる。こうした主要中銀に続いてタイ中銀も29日にMPCを開催し、事前予想通り0.25%ptの利上げを行っており、やはり依然としてインフレ抑制に向けた対策が必要であることと、想定よりも早い観光産業の回復がタイ経済を下支えしていることから、継続した金融政策の正常化が必要と評価している。

ただし、次回MPC以降も利上げを行えば2.00%に政策金利が引き上げられ、コロナ禍以前の水準へと進んでいくことになる。インフレ抑制を理由に2%までは引き上げるだろうと個人的に考えているが、それ以上の引き上げは既に産業界から懸念の声も出ているため、利上げ停止観測も高まりやすい水準だと推測。そのため金融政策正常化を理由にバート買いが盛り上がるということは考えにくい上、欧米の銀行に対する不安も後退したためリスクオフのドル買いも入りにくく、次のイベントや今後方向感を探るムードになることで動きが出にくいのではないかと考える。

一方、米金利に目を向けると、3月FOMCで示されたドットチャートと足許の市場参加者が見ている金利の到達点にはギャップがあり、FOMCメンバー>市場という状況であるため、何かしらが起点となってドル買い機運が高まる可能性には注意したい。以上より、4月はタイ中銀もFRBも周期的にイベントが無く、4月下旬以降は次回5月FOMCに向けてブラックアウト期間にも突入するため、一旦次の展開待ちとなってドルバートは上値重い展開になると予想している。

■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地で感じた日本との一番のギャップ』

当地で感じた日本との一番のギャップは移動手段のお手頃さだと思います。日本では自家用車以外の交通手段となると、電車やバス利用になると思いますが、当地バンコクでは圧倒的にタクシーやGrab、Muvmi(電動トゥクトゥク配車サービス)を利用することが多いです。

それぞれの特徴としては、

・タクシー(どこでも行けるが、値段交渉の場合有り。ぼったくり注意)

・Grab(料金は距離で決まるが流しのタクシーより高め)

・Muvmi(一番低価格だが、移動可能エリアが地区で区切られており、エリアを跨ぐ移動不可且つ直ぐつかまらないことも多い)

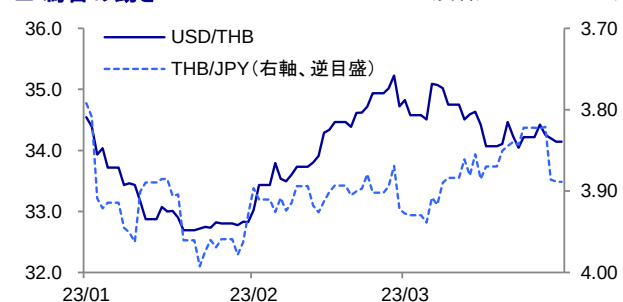
このようにそれぞれ一長一短がありますが、全体的に日本の電車賃(近距離)に近い値段で駅近に限らず自分の行きたいところに行けますので、ついつい近距離でも利用しがちです。(複数人利用なら1人あたり更にお得！)

日本でタクシーに乗ることは値段の関係で個人的にかなり躊躇してしまいましたが、バンコクではお手頃な値段で気軽に乗ることが出来るため、観光や出張で訪れる人にとっても非常に便利だと思います。

タクシー利用のポイント等は「タイ タクシー」というようなワード検索をすれば、ブログで親切丁寧に解説されている方も多いため、日本から人気の旅行先でもある当地にいらっしゃる際には、是非これらの移動手段をフル活用してタイの魅力を存分に満喫して頂きたいです。

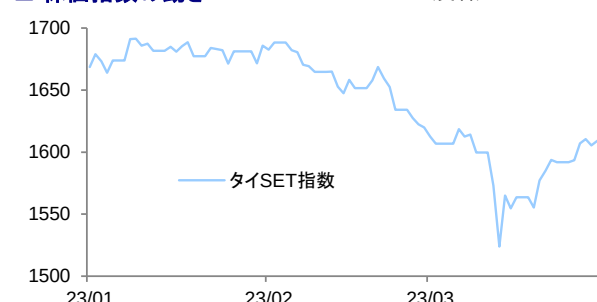
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/7	CPI YoY	2月	4.10%	3.79%	5.02%
3/7	CPI コア YoY	2月	2.00%	1.93%	3.04%
3/9	消費者信頼感指数	2月	-	46.8	46.0
3/23	自動車販売台数	2月	-	71,551	65,579
3/29	タイ中央銀行指標金利	-	1.75%	1.75%	1.50%
3/30	輸出(通関ベース)YoY	2月	-7.00%	-4.70%	-4.50%
3/30	輸入(通関ベース)YoY	2月	2.00%	1.10%	5.50%
3/30	貿易収支(通関ベース)	2月	-\$1,414M	-\$1,113M	-\$4,650M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.35	～	4.45
	MYR/JPY	29.58	～	30.49
	JPY/MYR	3.28	～	3.38

マレーシアみずほ銀行 内田 壘

■ 先月の為替相場

先月のリングット相場は米国発の銀行不安によりボラティルな値動き。上旬にかけてはUSD/MYRは一時4.5を突破する展開となったが、下旬は買戻しが入り、月全体で見ればMYR上昇となった。

上旬は国内で9日にマレーシア中銀が2会合連続での政策金利据え置きを決定。市場参加者間でサプライズなし。国内市場は特段大きな材料なかったが、国外では7日NY時間にパウエル議長が議会証言の中でFF金利のピークレートが従来想定を上回る可能性を示唆。利上げペースの加速を想起させる内容としてドルが急騰。USD/MYRは心理的な節目となる4.5台を突破しMYR安となった。米金利は逆イールドが進展し、米2年債利回りは07年以來の5%超えを記録。

中旬にかけては、米国SVB破綻を皮切りにスイス銀大手クレディスイスの経営不安が市場の不安を煽る中、市場はリスク回避へ動いた。米国発ショックでEURやJPYなどの安全資産へ資金が流れる中、基軸通貨ドル買いとならず下落。その後、各種救済措置が発表されると市場は一旦落ち着きを取り戻した。22日のFOMCを控えて注目されていた米2月CPIは市場予想と一致し、PPIは若干市場予想を下回る内容。銀行破綻で市場が混乱する中で経済指標への反応は限定的。

下旬は銀行不安が各国当局による関与も含めた救済報道で落ち着き、市場のリスクセンチメントが改善。USD/MYRは下値を追う展開。国内では遅れて発表となった2月貿易統計が市場予想を上回る結果だった一方、主要輸出相手国の中国向け輸出は前年比▲6%など引き続きの不安材料が残る内容。注目の米FOMCは、銀行不安が完全に払拭されない状況下、市場コンセンサスに沿う形で25bpの利上げ幅にとどめた。パウエル議長は会見で、インフレ抑制への取組が足元顕在化している銀行不安によって深刻な影響を与えないと明確な姿勢を示したが、市場はドル売りで反応。24日に発表された2月CPIは市場予想を若干上回る+3.7%。食品価格が前年比+7.0%と高止まりしたことで全体を押し上げる格好となった。その後は、特段材料なく月末のMYR買いフローで下げ幅を広げ、月全体を通して見ればMYR買い水準で引けとなった。

■ 今月の見通し

今月のリングット相場は引き続き米国発金融システムへの警戒をしながらの相場展開になるとみている。

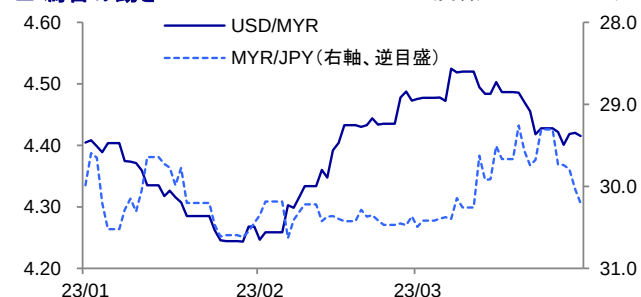
各国当局も含めた救済策が早期に纏まったことで金融市場は一旦落ち着きを見せている一方、中央銀行による積極的なインフレ抑制策により景気後退入りが予想される中、コロナ禍で世界的な金融緩和により形成された良好な資金調達環境は、急激な金利上昇と共に一気にタイト化している状況である。かかる状況下、SVBやSignature Bankに続いて、銀行破綻懸念が広がる状況となれば、為替市場のボラティリティは一段と高まろう。先月のSVB破綻時には、米国発ショックだったこともありUSD/MYRの上昇幅は限定的だったが、更なる金融不安に広がる事態となれば、リスク回避の新興国通貨売りが予想され、先月のUSD/MYR高値4.53抜けを目指す展開となるだろう。

国内での注目材料は貿易統計と消費者物価。また、4月はマレーシア中銀の政策会合は予定されておらず次回は5/3となる。19日発表予定の3月貿易統計では、特に対中貿易と石油関連製品の成長率に注目したい。ゼロコロナ政策解除に伴う中国経済の回復に期待が寄せられる中、足元減速傾向が顕著な対中貿易、そして北海原油の80ドル割れが定着しつつある状況でもあることから注視したい。また、2月PPIが前年比マイナスに落ち込む中、2月CPIは依然として前年比+3.7%と高止まりしている。食品価格やサービス価格の上昇が続く様であれば、個人消費の減退が国内経済の足を引っ張る構図が見えてくる。

一方、上記のような懸念事項が杞憂に終わればドルの緩やかな下落に伴い、MYRの上昇が期待される地合と見ている。対円では4/28に予定されている植田新総裁での日銀初会合が市場では注目されており、発表前後でのMYR/JPYの急変動には注意したい。

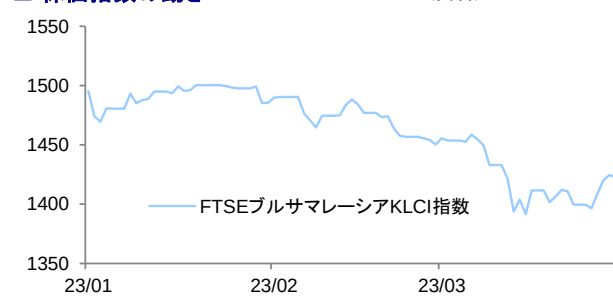
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/7	Foreign Reserves	Feb 28	-	\$114.3b	\$114.4b
3/9	BNM OPR	Mar 9	2.75%	2.75%	2.75%
3/13	Industrial Production YoY	Jan	2.3%	1.8%	3.0%
3/20	Import YoY	Feb	6.4%	12.4%	2.3%
3/20	Trade Balance MYR	Feb	18.50B	19.56B	18.16B
3/20	Exports YoY	Feb	4.7%	9.8%	1.6%
3/22	Foreign Reserves	Mar 15	-	\$114.0b	\$114.3b
3/24	CPI YoY	Feb	3.6%	3.7%	3.7%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14800 ~ 15300
 IDR/JPY 0.8621 ~ 0.8929
 JPY/IDR 112.00 ~ 116.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 網島 正侑記

■ 先月の為替相場

3月のルピアは上昇。

月初1日、ドルルピアは15200台半ばで取引を開始。発表されたインドネシアの2月のCPIの結果は5.47%と事前市場予想(5.42%)と近い結果となり、市場の反応は限定的。15200台前半から後半にかけてのレンジ内での取引が続いた。海外時間に入り発表された良好な米指標結果を受け米金利上昇・ドル高の流れとなると翌2日のルピアは対ドルで下落。ドル買いの流れが継続する中、ルピアは徐々に下落幅を拡大、7日海外時間に行われたパウエル議長の議会証言はタカ派的と捉えられ米金利上昇・ドル高が加速。翌8日のアジア時間からルピアは15400台半ばまで下落幅を拡大させた。週後半にかけてもややドル高が優勢な展開となる中、15400台半ばでルピアは軟調に推移となったが10日海外時間に発表された米雇用統計の結果、失業率が予想を上回ったことや平均賃金の伸び率が鈍化したことを受け市場はドル売りで反応。加えてその後の米地銀の破綻との報道を受けドルが売られる展開となると、週明け13日のルピアは15300台半ばまで値を下げて取引を開始し、その後も同水準で推移。15日に発表された貿易収支の結果は事前予想を上回る貿易黒字となったが、輸入が鈍化したことによる黒字額増という背景もあり、反応は限定的。海外時間にはクレディスイスの経営についての懸念が注目されるとリスク回避的な値動きとなり、翌16日新興国通貨が売られる中ルピアも15400台半ばまで一時下落したが引けにかけては15300台半ばまで値を戻した。この日、インドネシア中銀会合では政策金利を据え置くことが決定されたが、事前の予想通りでもあり市場の反応は限定的。その後も同水準の狭いレンジ内での取引が続いたが、インドネシア休日となる22日の海外時間に発表された米FOMC会合の結果、0.25%の利上げが決定され利上げ幅自体は事前予想と一致したが、その後のパウエル議長の会見がハト派的と捉えられると米金利低下・ドル売りの流れが強まり、連休明けとなる23日ルピアは15100台半ばまで上昇。ドル売りが優勢な中、ルピアは底堅く推移し15100を割り込み2月上旬以来となる15000台半ばまで上昇してクローズした。

■ 今月の見通し

4月のルピアは対ドルで堅調に推移するものと予想。

一連の金融機関への経営不安、システミックリスクの高まりを受け米利上げ織込みは急速に低下し、利上げ停止との織込みも進む中、米金利低下・ドル安の流れが進むものと予想。システミックリスクが意識される局面下では新興国通貨全般に軟調な値動きとなり、ルピアも売られやすい環境となると考えられるが、足元では銀行へ対する支援策が相次いで発表されていることに加え、破綻したSVB銀行の買収も発表される等、一旦システミックリスクへの懸念は後退しつつある状況。システミックリスクへの懸念が再燃しないのであれば、米金利低下・ドル売りの流れに素直に反応しルピアは対ドルで上昇するものと考えられる。

一方で、ルピアを取り巻く環境も決して良好とは言いがたく、ルピアが中期的に下落するリスクは引き続き高いと考える。昨年、通年で過去最大の貿易黒字計上するに至った一つの要因である石炭価格の高騰も、昨年後半から下落に転じており特に年明け以降では大幅な下落を記録している。既に石炭価格が高騰する前の水準まで下落してきており、貿易黒字の縮小、ひいては経常収支の赤字化が懸念される状況であることを踏まえれば中期的にルピアが下落すると考えられよう。

4月こそ米利上げ停止に関する織込みが進むに連れたドル安・ルピア高を予想するものの、年後半にかけてはルピア安が進展すると予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で感じた日本との一番のギャップ』

初めてジャカルタを訪れた際、空港から滞在予定のホテルまで移動する間、多くの高層ビルが立ち並び、夜でも明るい街並みを見て「(私の)地元よりも都会だな」と感じました。

しかし、翌朝ホテルを出発して最初の目的地に向かうまでの間に驚愕しました。片側3車線の通りに4台が横並び、我先にとクラクションを鳴らしながら車間距離を詰め、全く進む気配のない目抜き通り。世界の中でも渋滞がスゴイと言われるのはこういうことかと。

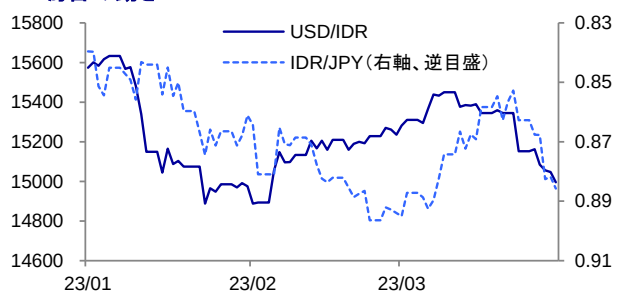
日本では渋滞していても路肩を走る車はほぼ無いですし、クラクションを鳴らすことや車間距離をギリギリまで詰めることもあまり無いかと思いますが、そんなことをジャカルタで言っているのは10メートル進むのに30分はかかるのではと思う程。

この渋滞を解消するために色々な施策が導入されています。ユニークなのは車のナンバーが偶数か奇数かで一部の通りに通航制限が課される等。偶数の日(2日、4日等)であれば偶数のナンバーの車のみ通行可、逆に奇数の日は奇数ナンバー車のみとしており、初めて聞いた際は冗談かと思いましたが実際に導入されている規制。

東京も渋滞が酷いときもありますし、どの国でも悩ましい問題なのかもしれません。

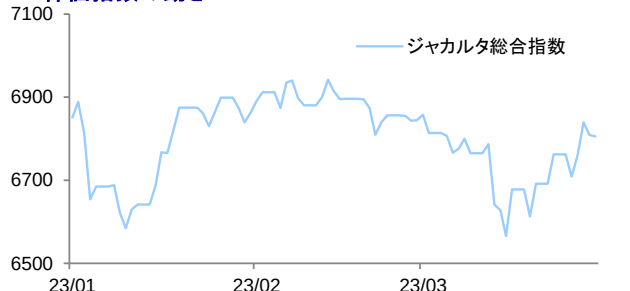
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/1	CPI(前年同月比)	2月	5.42%	5.47%	5.28%
3/15	貿易収支(USD M)	2月	3,286	5,480	3,870
3/15	輸出(前年比)	2月	4.60%	4.51%	16.37%
3/15	輸入(前年比)	2月	9.06%	-4.32%	1.27%
3/16	BI 7daysリバースレポ金利	-	5.75%	5.75%	5.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 53.50 ~ 56.00
JPY/PHP 0.40 ~ 0.43

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

中国の好調な経済指標やFRB高官のハト派発言を受けたセンチメント改善のほか、フィリピン中銀のメダラ総裁が2月のCPIが9%を超えた場合は50BPの利上げの可能性が高いとの見方を示したこともペソのサポートとなり、1米ドル＝54ペソ台を回復する局面も見られた。しかしながら、フィリピンの2月CPIは前年同月比+8.6%と前月から僅かに鈍化したものの、次回会合での25BPへの利上げペース減速観測が高まったほか、従来の想定以上の米政策金利引き上げの可能性が高いとしたパウエル議長の議会証言でのタカ派発言を受けてペソは反落し、上旬は往って来いの展開となった。

2月の米雇用統計が警戒された程、強い結果とならなかったことや、米シリコンバレー銀の破綻を受けて、米利上げ織り込みが大幅に剥落の一方で、欧米金融セクターに対する警戒感からリスクオフとなるも、ペソ為替市場への影響は限定的となるなか、ペソは堅調推移。1月のフィリピンの貿易統計では輸出減と輸入増を受けて貿易赤字が前月から拡大したことや、1月のフィリピンの海外在留労働者からの送金額が27.6億ドルとなり、前年同月比で3.5%増と市場予想の5.3%を下回ったことがペソの上値を抑えたが、金融当局による金融システム安定化対策から欧米金融セクターの混乱に沈静化の兆しが見られたほか、1月のフィリピンの財政収支が前月の赤字から457億ペソの黒字に転換したことが好感されペソは下旬にかけて上昇基調を維持した。

FOMCは声明文やパウエル議長の記者会見にて引き締め継続に対するトーンが弱まり、総じてハト派な内容となるなか、米利下げ織り込みが加速し、ドル安となったほか、フィリピン中銀は政策会合にてインフレ見通しを下方修正したことからもペソは堅調推移となった。しかしながら、メダラ総裁はデータ次第としながらも次回5月会合の利上げ停止の可能性を示唆したことや、欧米銀行セクターを巡る懸念緩和を受けたドル金利上昇に連れたドル上昇圧力から、1米ドル＝54ペソ付近では上値の重さが見られ、下旬は1米ドル＝54ペソ台前半での横ばい推移となった。月を通して、ペソは堅調推移となり、約1か月半ぶりの高値まで上昇する展開となった。

■ 今月の見通し

3月のFOMCにおいて25bpの利上げが実施されたが、FRBは金融不安頭頭による景気やインフレへの下押し圧力は利上げの代わりになり得ることから、利上げの必要性が後退した可能性を認めており、中長期的に米金利上昇余地は限定的との見方。

一方、年末にかけての米利下げ織り込み加速により、市場の織り込みはドットチャートを下回っており、短期金利の更なる低下余地も限定的と考え、ドルは方向感に欠ける展開が想定される。

但し、パウエル議長はインフレは依然として高く、労働市場は逼迫しており年内利下げは検討せずと言及していることから、金融不安が沈静化した場合、市場の織り込みが修正される過程ではドル上昇圧力が高まる可能性があるだろう。

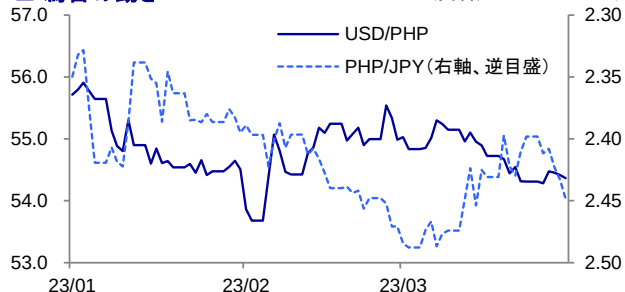
欧米金融不安のアジア諸国への直接的影響は軽微との見方から足許のアジア通貨は堅調だが、リスクオフ下で米金利低下の恩恵を受けた上昇であり、今後リスクオフが後退する局面でも米金利が上昇すればアジア通貨の重しとなる。

フィリピン中銀もインフレブ레이크アウトの兆しを受けて、5月或いは6月の会合で利上げ停止に政策転換する可能性が高いほか、フィリピンの貿易赤字は依然として高水準で推移しており、金融政策や需給面から見ると、足元水準からの一段のペソ高となる材料には欠ける。

金融セクターに対する目先の懸念は和らいでいるが、完全に払拭されたわけではなく、今後危機が世界的に波及した場合はリスクオフからアジア通貨が急落する可能性にも留意したい。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 81.50 ~ 83.50
INR/JPY 1.58 ~ 1.68

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【3月の米ドル/インドルピーは方向感の定まらない展開】

82.49で当月取引を開始。月初は良好な中国指標を受けた人民元堅調推移やインド国営銀行がシンジケートローン絡みでドル売りを行っている指摘に上値の重い展開。3日にはアダニグループ株に海外投資家の資金が戻っているとの話にドル売り/ルピー買いが意識され、大台の82を下抜ける。心理的節目である82を抜けたことからやや走り、6日には当月安値となる81.62を示現。ただこの場面でインド中銀がドル買い為替介入がしっかり出るのを見て、底打ち。その後パウエルFRB議長が0.5%の利上げについて言及したことから82.30レベルまで一気に吹き上がった。その後も外国人投資家のインド株式市場における買い越しが目立ったほか、年金ファンド系のドル売りが出るなどルピー買いフロアが目についたものの、RBIのドル売り介入が断続的に入り、81台に入ると途端に重い動きに。併せてシリコンバレー銀行の破綻が取り沙汰されると、リスクセンチメントは悪化、対新興国通貨全般で安全資産ドル選好が進むとルピー高が難しいと見た地場輸入企業がドルヘッジを出し、ドル/ルピーは上昇。16日には当月の高値となる82.81を示現。ただ、この日はRBIはドル売り介入を出しルピー安を止めに行く展開。83をトライする雰囲気はなかった。米銀やクレディスイスに対する救済策が発表されるとセンチメントは回復、ドル/ルピーも反転下落する展開。

20日週に入ると、クレディスイスのTier1資本の債務者の扱いが焦点、再度リスクセンチメントは悪化、ドル/ルピーも82の後半へ。ハト派と捉えられたFOMCを通過すると再度82前半まで落ちるが、地場石油輸入企業が大口のドル買いを入れているとの話に82.00割れを試す展開にはならず。

月末にかけては決算期末フローでドル売り/ルピー買いが意識される展開の中、First Citizens BancSharesがSilicon Valley Bankの預金を全て引き受けることに合意したとのヘッドラインにリスクセンチメントは改善し、ルピーにも追い風に。82.34で29日の取引時間を終えた。

■ 今月の見通し

【4月の米ドル/インドルピーは83を挟んでの展開を想定】

インド国内要因では先月・先々月と本欄で書いてきた内容通りの展開となっており、4月についても中銀の為替介入が大きなテーマとなるだろう。3月は前半に81台までドル安が進む場面ではドル買い介入を行い、後半に82.80までドル買いが進む場面ではドル売り介入を行った。インド中銀は為替介入のタイミングについて、特定の為替水準を設けず為替変動を抑制する、としている。3月はまさに売りも買いも両サイドの介入が出ており、変動抑制が目立った月だった。4月についても、81半ばを試す場面ではドル買い介入、83を試す場面ではドル売り介入といった水準感を持っておきたい。

また4月6日にRBI政策会合が予定されている。2月の利上げ以来、2回発表があったインフレ率はいずれも6%半ばと中銀のインフレターゲットからは上方乖離している状況。4月については従前金利据え置きがマジョリティだったが、これらを通して0.25%の利上げを想定している向きが多くなっている。

米国要因では米債券利回りの低下が目立つ。背景はシリコンバレー銀行の破綻を端緒としたリスクセンチメントの悪化である。これを受け、米利上げ観測も急速にしぼみ、短期金利先物では7月の利下げが織り込まれるようになった。今回の問題の背景は特定の銀行、固有のものではなく、金利上昇を受けたALMがボトルネックとなっており大小あれど広くどの銀行も影響を受けていることは認める。ただ、救済策が出されていることから一旦最悪シナリオは回避されている。

マーケットは予期していないイベントに対してオーバーリアクションを取るのが常。今回については利上げ観測が再度高まる場面で米金利の上側への調整に備えておくのが良いのでは。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で感じた日本との一番のギャップ』

インドのムンバイに赴任して1年半が経過し、その中で一番感じるギャップは、交通事業である。

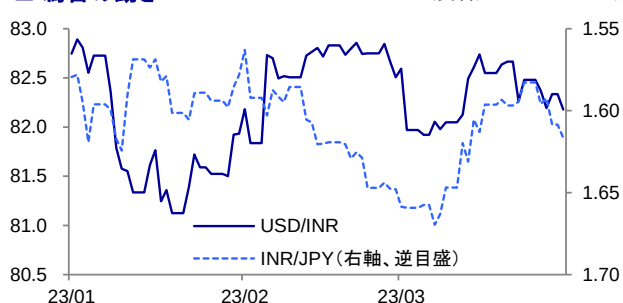
都心部と地方、どちらにいてもクラクションを昼夜問わず、勢い良く鳴らす。車やバイクを運転している者が、”ここにいるよ！通るよ！道を開けて！”と、ここぞとばかりにアピールしてくる。人間だけでなく、牛や、犬、猫、鶏などの動物が自由にどこでも歩き回っている道で、接触事故を防止するには、常にクラクションを鳴らしていないと、対応できないのだと思う。

さらには、信号機がある意味があるのか、とってしまうほど、交通マナーやルールも、私達日本人の想像を超えている。最大積載人数の決まりはないのか、バイクにヘルメット無しで、お父さんが子ども2人とお母さんの家族全員で乗っている姿。通常の乗用車の運転席を含むフロントに4人乗って、運転している様子。運転免許をお金で買う大勢の人々。小学生か中学生がバイクを運転している様子など。

インド人は、この様子に慣れっこで衝撃を受けたりはしない。この遅いインド人の姿をみると、インドの暗黙の交通ルールのなかで運転することは、日本人にはほぼ不可能なのではないか、と思わずにはいられない。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
3/1	製造業PMI
3/10	鉱工業生産
3/13	CPI

(資料) ブルームバーク

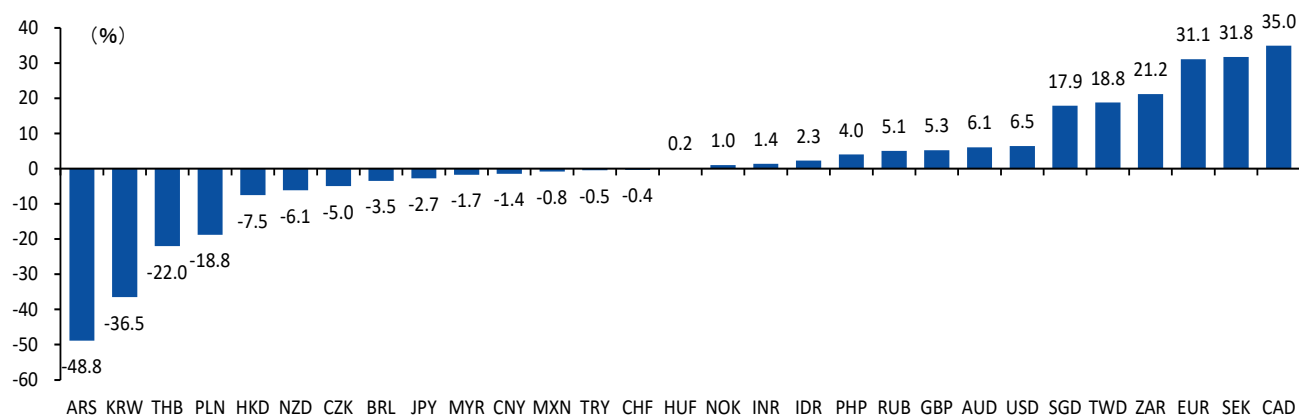
期間	予想	結果	前回
2月	-	55.3	55.4
1月	5.10%	5.20%	4.70%
2月	6.40%	6.44%	6.52%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2022年末	2023年3月末	騰落率	株式市場	2022年末	2023年3月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	33147.25	33274.15	0.4%	-
日本	USD/JPY	131.12	132.86	1.3%	日経平均株価	26094.5	28041.48	7.5%	6.1%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0705	1.0839	1.3%	ドイツDAX指数	13923.59	15628.84	12.2%	12.2%
英国	GBP/USD	1.2083	1.2337	2.1%	ロンドンFTSE100指数	7451.74	7631.74	2.4%	0.3%
豪州	AUD/USD	0.6813	0.6685	-1.9%	S&P/ASX200指数	7038.688	7177.754	2.0%	3.9%
カナダ	USD/CAD	1.3554	1.3516	-0.3%	S&PTロント総合指数	19384.92	20099.89	3.7%	4.0%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8986	6.8737	-0.4%	上海総合	3089.258	3272.86	5.9%	6.3%
香港	USD/HKD	7.8016	7.8498	0.6%	香港ハンセン	19781.41	20400.11	3.1%	2.5%
インド	USD/INR	82.735	82.1775	-0.7%	インドSENSEX30種	60840.74	58991.52	-3.0%	-2.4%
インドネシア	USD/IDR	15573	14996	-3.7%	ジャカルタ総合	6850.619	6805.277	-0.7%	3.2%
韓国	USD/KRW	1260.33	1301.59	3.3%	韓国総合株価	2236.4	2476.86	10.8%	7.2%
マレーシア	USD/MYR	4.4045	4.4152	0.2%	ブルサマレーシアKLCI	1495.49	1422.59	-4.9%	-5.1%
フィリピン	USD/PHP	55.741	54.366	-2.5%	フィリピン総合	6566.39	6499.68	-1.0%	1.5%
シンガポール	USD/SGD	1.3395	1.3309	-0.6%	シンガポールST	3251.32	3258.9	0.2%	0.9%
台湾	USD/TWD	30.73	30.487	-0.8%	台湾加権	14137.69	15868.06	12.2%	13.1%
タイ	USD/THB	34.608	34.143	-1.3%	タイSET	1668.66	1609.17	-3.6%	-2.3%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2023年3月時点)



■ 実質GDP成長率

	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2021	2022
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	7.0	2.7	7.0	-1.6	-0.6	3.2	2.6	5.9	2.1
日本*	1.4	-1.4	4.5	-1.8	4.7	-1.1	0.1	2.3	1.0
ユーロ圏	14.2	4.0	4.8	5.5	4.4	2.4	1.8	5.3	3.5
英国	24.4	8.5	8.9	10.6	3.8	2.0	0.6	7.6	4.1
豪州	10.3	4.1	4.6	3.0	3.1	5.9	2.7	5.3	3.7
カナダ*	-2.3	5.9	6.9	2.4	3.6	2.3	0.0	5.2	3.4
エマージングアジア									
中国	8.3	5.2	4.3	4.8	0.4	3.9	2.9	8.4	3.0
香港	7.6	5.5	4.7	-3.9	-1.2	-4.6	-4.2	6.4	-3.5
インド	21.6	9.1	5.2	4.0	13.2	6.3		6.5	9.1
インドネシア	7.1	3.5	5.0	5.0	5.5	5.7	5.0	3.7	5.3
韓国	6.2	4.0	4.2	3.0	2.9	3.1	1.3	4.1	2.6
マレーシア	15.9	-4.5	3.6	5.0	8.9	14.2	7.0	3.1	8.7
フィリピン	12.1	7.0	7.8	8.2	7.5	7.6	7.2	5.7	7.6
シンガポール	17.3	8.7	6.6	4.0	4.5	4.0	2.1	9.1	3.7
台湾	7.9	4.1	5.2	3.9	3.0	3.6	-0.4	6.5	2.5
タイ	7.8	-0.2	2.0	2.2	2.5	4.6	1.4	1.6	2.6

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	22/07	22/08	22/09	22/10	22/11	22/12	23/01	23/02	2021	2022
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.5	3.7	3.5	3.7	3.6	3.5	3.4	3.6	5.4	3.6
日本	2.6	2.5	2.6	2.6	2.5	2.5	2.4	2.6	2.8	2.6
ユーロ圏	6.7	6.7	6.7	6.6	6.7	6.7	6.6	6.6	7.7	6.7
英国	3.6	3.5	3.6	3.7	3.7	3.7	3.7		4.6	3.7
豪州	3.5	3.5	3.6	3.4	3.5	3.5	3.7	3.5	5.1	3.7
カナダ	4.9	5.3	5.2	5.2	5.1	5.0	5.0	5.0	7.5	5.3
エマージングアジア										
中国									3.9	
香港	4.3	4.1	3.9	3.8	3.7	3.5	3.4	3.3	5.4	4.3
インドネシア									6.4	5.9
韓国	2.9	2.6	2.8	2.8	2.8	3.1	2.9	2.6	3.6	2.9
マレーシア	3.7	3.7	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6		4.6	3.8
フィリピン	5.2	5.3	5.0	4.5	4.2	4.3	4.8		7.8	5.4
シンガポール	2.1	1.9	2.1	2.0	1.9	2			2.7	2.1
台湾	3.7	3.7	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	4.0	3.7
タイ	1.4			1.2			1.2			

(資料)ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	22/06	22/07	22/08	22/09	22/10	22/11	22/12	23/01	23/02	2021	2022
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	9.1	8.5	8.3	8.2	7.7	7.1	6.5	6.4	6.0	4.7	8.0
日本	2.4	2.6	3.0	3.0	3.7	3.8	4.0	4.3	3.3	-0.3	2.5
ユーロ圏	8.6	8.9	9.1	9.9	10.6	10.1	9.2	8.6	8.5	2.6	8.4
英国	9.4	10.1	9.9	10.1	11.1	10.7	10.5	10.1	10.4	2.7	9.1
豪州	6.1			7.3			7.8			2.9	6.6
カナダ	8.1	7.6	7.0	6.9	6.9	6.8	6.3	6.3	5.9	3.4	6.8
エマージングアジア											
中国	2.5	2.7	2.5	2.8	2.1	1.6	1.8	2.1	1.0	0.9	2.0
香港	1.8	1.9	1.9	4.4	1.8	1.8	2.0	2.4	1.7	1.6	1.9
インド	7.0	6.7	7.0	7.4	6.8	5.9	5.7	6.5	6.4	5.1	6.7
インドネシア	4.4	4.9	4.7	6.0	5.7	5.4	5.5	5.3	5.5	1.6	4.2
韓国	6.0	6.3	5.7	5.6	5.7	5.0	5.0	5.2	4.8	2.5	5.1
マレーシア	3.4	4.4	4.7	4.5	4.0	4.0	3.8	3.7	3.7	2.5	3.4
フィリピン	6.1	6.4	6.3	6.9	7.7	8.0	8.1	8.7	8.6	3.9	5.8
シンガポール	6.7	7.0	7.5	7.5	6.7	6.7	6.5	6.6	6.3	2.3	6.1
台湾	3.6	3.4	2.7	2.8	2.7	2.4	2.7	3.1	2.4	2.0	3.0
タイ	7.7	7.6	7.9	6.4	6.0	5.6	5.9	5.0	3.8	1.2	6.1

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2021	2022
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.3	-3.4	-3.5	-3.8	-3.8	-3.7	-3.6	-3.6	-3.7
日本	3.9	4.2	3.9	3.7	3.1	2.4	2.1	3.9	2.1
ユーロ圏	2.7	2.8	2.3	1.6	0.6	-0.7	-0.7	2.3	-0.7
英国	-2.9	-3.0	-1.5	-3.2	-4.2	-3.8	-3.8	-1.5	
豪州	3.0	3.5	3.1	2.3	2.0	1.0	1.2	3.1	1.2
カナダ	-1.0	-0.6	-0.3	-0.2	0.2	0.0	-0.4	-0.3	-0.4
エマージングアジア									
中国	2.0	2.0	2.0	2.0	2.1	2.4	2.4	2.0	2.2
香港	10.2	10.0	11.8	12.6	10.9	11.6	10.7	11.8	10.7
インド	0.4	-0.5	-1.1	-1.2	-1.9	-2.6	-2.4	-1.1	-2.4
インドネシア	-0.1	0.3	0.3	0.4	0.9	0.8	1.1	0.3	1.0
韓国	5.5	5.6	4.9	4.7	4.1	2.9	1.9	4.7	1.8
マレーシア	4.8	3.8	3.5	2.8	2.1	2.1	2.6	3.5	2.6
フィリピン	1.8	0.3	-1.8	-2.8	-4.6	-5.9	-4.6	-1.8	-4.4
シンガポール	16.7	17.0	18.0	19.8	20.1	20.3	19.3	18.0	19.3
台湾	15.5	14.9	15.1	15.5	14.9	14.3	13.5	15.1	13.5
タイ	0.8	-1.7	-2.1	-2.3	-3.4	-4.0	-3.5	-2.1	

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	4.75-5.00	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/2/1	+25bp	2023/3/20	+25bp
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2023/3/10	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	3.00	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/3/16	+50bp	2023/3/16	+50bp
英国	バンク・レート	4.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/3/23	+25bp	2023/3/23	+25bp
豪州	キャッシュ・レート	3.60	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/3/7	+25bp	2023/3/7	+25bp
カナダ	翌日物金利	4.50	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/1/25	+25bp	2023/3/8	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.65	緩和: 2012/6/8	6.31	2022/8/22	-5bp	2023/3/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2023/2/8	+25bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.75	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/1/19	+25bp	2023/3/15	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2023/2/23	現状維持
マレーシア	翌日物金利	2.75	引き締め: 2022/5/11	1.75	2022/11/3	+25bp	2023/3/9	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.25	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/3/23	+25bp	2023/3/23	+25bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.875	引き締め: 2022/3/17	1.125	2023/3/23	+12.5bp	2023/3/23	+12.5bp
タイ	翌日物レポ金利	1.75	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/3/29	+25bp	2023/3/29	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	6.00	引き締め: 2022/9/22	4.00	2022/10/25	+100bp	2022/10/25	+100bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBILレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行